

# ルーヴル美術館蔵アドルフ・テイエール (一七九七〜一八七七) 蒔絵コレクション

永島 明子

はじめに

ルイ・アドルフ・テイエール (Louis Adolphe Thiers) は、フランス革命後の一連の政変を生き、第三共和政の初代大統領をも務めた政治家である。また、歴史著述家としても多くの仕事を残した。その多忙な毎日を送りながら、東洋の磁器や漆器を含む美術コレクションを作り上げたことでも知られる。テイエールの没後、その妻の遺言と義妹の実行により、このコレクションはルーヴル美術館に寄贈され、現在も同館の一室にその一部が展示されている(図12-1)(挿図1)。

このコレクションは、二〇世紀の間はほとんど顧みられることがなかった。それは、テイエールが、一八七一年のパリ・コミューンを鎮圧し、その後も市民に対して徹底的な弾圧を行った政治家として嫌われたためであり、また、寄贈した絵画や彫刻が、一九世紀の歴史学者の蒐集品らしく、著名作品の複製を数多く含むために、価値のないものと軽視されたからである。しかし、テイエールの生誕

二〇〇年を記念した一九九七年のシンポジウムを機にそのコレクションも見直され、今では一九世紀半ばのパリで普遍主義的な歴史観を持つブルジョワが集め得た美術品の好例と位置づけられ、いくつもの研究が重ねられている。

テイエールのコレクションは、その経歴から、一八四〇年代から没年の一八七七年までのあいだのパリの美術市場を反映すると考えられている。そこには、幕末から明治初期の輸出漆器のみならず、一七世紀後半から一八世紀にかけての旧体制時代のコレクションから買い取られたと思われる蒔絵作品が数多く含まれている。

この蒔絵コレクションの調査をルーヴル美術館の当時の工芸部長、マルク・バスク氏からご提案いただいたのは二〇〇六年の夏であったが、時間と経費の確保のため、二〇一三年まで実現しなかった。この遅延にはしかし、良い面があった。まず、二〇一〇年にオランダルーヴル美術館名誉芸員のジュヌヴィエーヴ・ラカンブル氏が、フランス国内の公立美術館に眠っていた蒔絵を一堂に集めて展覧会を開くにあたり、テイエールの蒔絵作品の五分の一にあたる十三点を取り上げ、その性質や来歴について詳しく報告された<sup>1)</sup>。また、翌二

〇一一年には、その教え子である今井朋氏が、ティエールの東洋趣味コレクションを扱った修士論文をルーヴル学院に提出した<sup>(2)</sup>。特にこの今井氏の研究は、作品の所在確認はもちろん、緻密な文献調査によってティエールの経歴、周囲の人間の影響、ティエールの美術に対する視点、歴史観、東洋との接点、ルーヴル美術館への遺贈の経緯、その後のコレクションに対する社会の評価、さらには一九世紀パリの美術市場の動向などを網羅する、大変意欲的な労作である。このような先行研究のおかげで筆者は、全体像を知った上で調査に当たることができたのである。

本稿では、ティエールの美術コレクションに含まれる蒔絵作品を取り上げるにあたり、まず、ラカンブル氏と今井氏の研究に基づいて、コレクションの背景を概観する。次いで、ティエールの蒐集期における漆器貿易のおかれていた状況を振り返る。最後に個々の作品の調査結果を報告し、作品から窺い知れることがらと史実を照らし合わせて、このコレクションの蒔絵の輸出の通史の中での位置を探りたい。

### ティエールの経歴と美術蒐集<sup>(3)</sup>

ティエールは、マルセイユの中産階級の出身だが、少年期は財政的にも家庭的にも恵まれなかったようだ。エクスで法科に進み、弁護士資格を得ながら、広く文芸、歴史に興味を示し、弁説や評論の修練を積んだ。一八二一年に王政復古期のパリに出て、自由主義派の弁護士や記者などと親しくなり、パリで最も影響力のあった新聞に、政治に関する記事を寄稿するうちに徐々に注目さ

れ、人に勧められて一八二七年までに『フランス革命史』全十巻を著し、その独裁政治への批判的な態度などから国民の支持を得るようになる。この頃、美術批評なども執筆しており、アングルやドラクロワとも親しかったという。一八三〇年の七月革命の折には、ルイ・フィリップを擁立して活躍し、エクス選出の代議員として政治家の道を歩み始める。ルイ・フィリップの政府で内務大臣や商務大臣を歴任し、首相も二度務めた。そのような中、将来の姑となるユリデイス・ドーナ（一七九四～一八六九）と出会って意気投合する。

ドーナ夫人は、ティエールより三歳年長で、その夫は、金融業と不動産業で財を成した裕福な実業家であった。夫は仕事で各地を飛び回り、ほとんど家にはいなかったらしい。ティエールは大きな後ろ盾もなく、このころ借金も抱えて財政面に不安があった。そこでこの夫妻の同意の下、一八三三年、当時十五歳だった二人の長女、エリーズ・ドーナ（一八一八～八〇）と結婚する。この結婚の後、ティエールはドーナ一家と住むことになるが、ドーナ氏は相変わらず仕事のためにほとんど留守であり、実際にはドーナ夫人、エリーズ、そしてその妹のフェリシー・ドーナ（一八二四～一九〇六）との四人暮らしが始まったのである。この三人の女性とティエールは、読書や美術鑑賞などの趣味を共有し、互いに労りあって過ごしたらしい。この結婚によりティエールは、社会的な地位と財産に加え、心休まる家族を得たことになる。

ティエールが出張先からこの新しい家族に送った手紙から、東洋の美術品に興味を持ち始めたのは、一八四一年に、ドレスデンのアウグスト強王の陶磁器コレクションに感銘を受けた頃とされる。今井氏の研究によれば、ティエールは、当時のパリにいた東洋学者た

ちとも交流を持ち、蔵書には、ケンペルの『日本誌』や、ティツィングの『日本王代一覽』のそれぞれフランス語版が含まれていた。また特筆すべきことに、一八六一年に来日した陸軍大佐デュ・パンが、一八六八年にパリで公刊した『日本』の、署名入直筆草稿を所蔵していた。これにティエールの修正が数多く加えられているため、デュ・パンが公刊した『日本』の序文に「我々が知る最も偉大な作家のひとりで政府の要人」の優れた助言に後押しされたのである。この著作には、ティエールを指す可能性が高いとのことである。この著作には、開港されたばかりの横浜のようすや、宿におしかけてくる日本の商人たち、日本でしか手に入らない優れた商品、中国美術と日本美術の違い、象牙の彫刻、銅製品などなど、ティエールが興味を持ちそうなことがあれこれと書かれている。デュ・パンが持ち帰った日本の品をティエールが買ったことについては、後述する。

さて、ティエールが三人の女性たちと暮らしたサン・ジュールジュ広場の屋敷（現在のティエール図書館の建物）は、パリ・コミュニティによって一度破壊されてしまうのだが、このとき、屋敷の美術品が破壊または略奪されるのを阻止するために尽力したのは画家のクールベだったという。爆撃が始まる前に、屋敷の中身は目録に記録され、様々な公共施設に匿われ、難を免れた。この目録のおかげで当時の屋敷の内部のようすを知る事ができる。そこには「ルイー五世様式の白いサロン」や「ロココ様式の前室」などがあり、中国の磁器や日本の漆器、それらを西洋の金工細工でマウントした置物などが飾られていたことが記されており、ティエール一家が絶対王政期の室内装飾を生活に取り入れていたとわかる。

ティエールが亡くなった翌年の一八七八年、ティエール夫人は、

夫妻の美術コレクションをルーヴルに遺贈するという遺言を認めた。具体的なリストと共に「ティエール夫妻寄贈」の表示を条件とする旨を明示した。夫人の亡くなった翌年、一八八一年に、妹のフェリシーは姉の遺言を実行し、さらに自らの嗅ぎ煙草入れのコレクションを寄贈した。このときの条件はさらに具体化し、ルーヴルの特定の部屋を展示室として指定し、「ティエール展示室」と命名するよう要請している。ドーナ嬢は、その後、ティエール家に残された書簡の一部を整理して公刊し、現在フランス学士院の一翼を担っているティエール財団を創設して、ティエール図書館を作り、一家の関係書類やルーヴルに入らなかった品々を寄贈し、また、身寄りのない独身女性のための老後施設、ドーナ養老院を作るなどして晩年を過ごした。彼女のおかげで、ティエールの東洋趣味コレクションと私的な生活の記録がまとまって現在に伝えられたのである。

ティエールのコレクションの伝世に重要な役割を果たしたもうひとりの人物は、シャルル・ブラン（一八一三〜八二）である。現在まで続くフランスの美術雑誌『ガゼット・デ・ボ・ザール』の初代編集主幹であり、ティエールと同じように美術に対して百科全書的な視点を持ち、二月革命後の美術学校の管理局長に任命されて、複製美術館の実現を計画するような人物であった。早くからティエールの普遍主義的な美術蒐集の態度を理解し、その未公開の私的コレクションを絶賛する記事をいくつも書いた。

この記事によって、ティエールの書齋やそこに飾られた美術コレクションが世に知られ、ある種、神格化されることになり、パリ・コミュニティの破壊事件の折に、クールベのような人々が動き、コレクションが守られたという側面がある一方、長く神秘のベールに包

まれていただけにコレクションの質と内容に対する人々の期待と関心が過大となり、一八八四年にルーヴルで初めて公開されたときの失望を誘ったという側面もある。シャルル・ブランは一八八四年の初公開にあわせて、ティエール・コレクションの総目録と描写を編纂している。「ティエール展示室」は第二次世界大戦の疎開の後、一九六五年頃に再編され、「ナポレオン三世の居室」の一角を構成

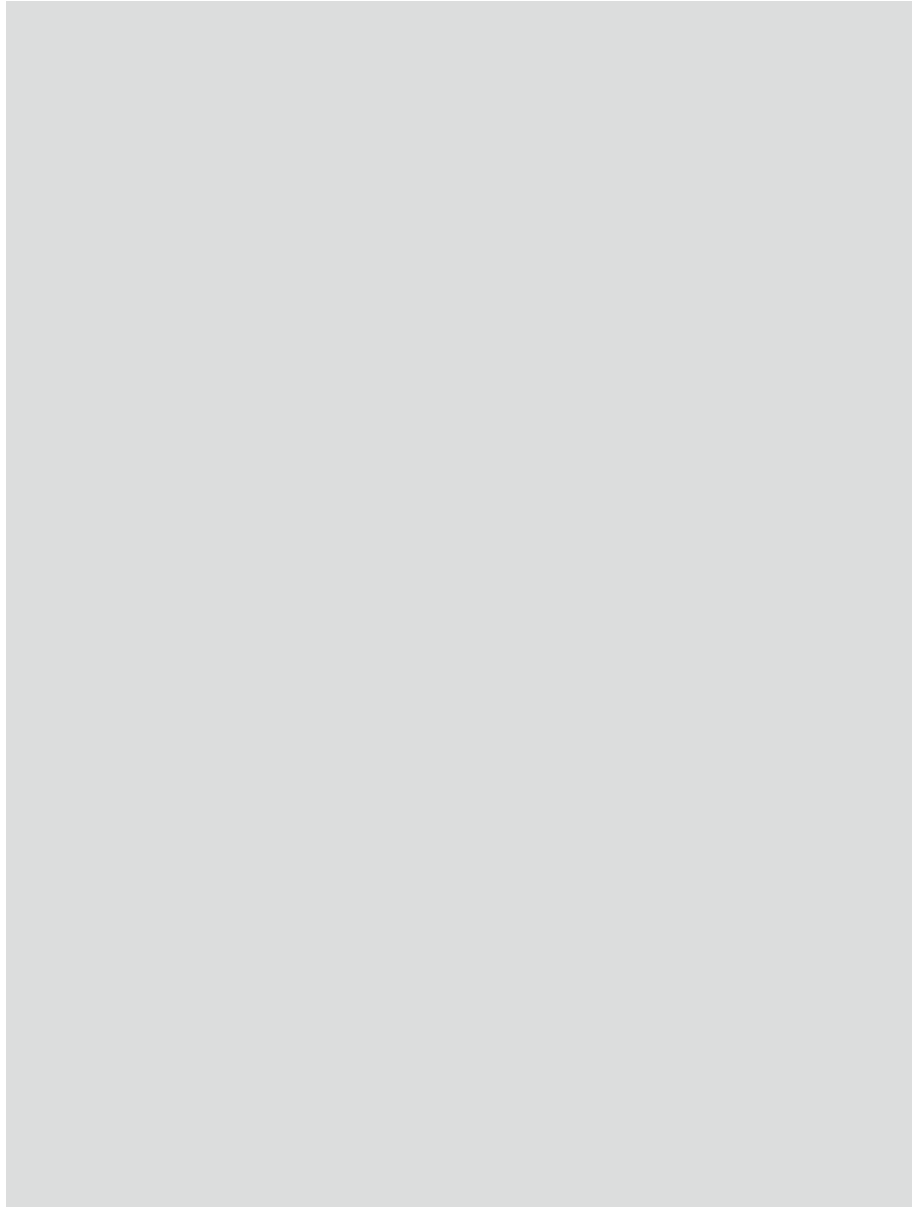
するようになり、現在に至っている。

今井氏の報告によれば、ルーヴルに寄贈されたティエールの美術コレクションは、エジプトや古代ギリシアの文物、銅や大理石で作られた彫像、ベネチアガラス、名匠による油絵の模写、中国絵画、銅器、陶磁器、七宝、象牙、漆器、あわせて四八二点。点数でいうとおよそ半分を中国や日本の品物が占めており、漆器は六五点におよぶ。

### ティエールの活躍期における

#### 日本の漆器貿易

ティエールが経験したフランス革命は、日本の漆器貿易にも大きな影響を及ぼした。江戸時代のはじめから、日本と公式な直接貿易ができたのは、オランダ船と中国船に限られていたが、一七九三年にフランス革命軍がオランダを占領し、一七九五年にはバタヴィア共和国を樹立させると、オランダによる交易の存続に危機が訪れた。一八〇四年にナポレオンが皇帝となると、オランダには弟のルイ・ボナパルトを国王に仕立てたオランダ王国が作られる。この混乱の中でアジアの貿易を担っていたオランダ東インド会社が倒産。一七九六年に国有化され、一七九



挿図1 ティエール・コレクションの展示室（と19世紀の乳母車かなにかを改造して作った小回りの効く工芸部の台車）

九年には解散させられてしまう。それでもオランダ東インド会社のアジアでの本拠地だったバタヴィアの商人には財力があり、日本との交易には相変わらず利潤が見込まれたので、一七九七年から一八〇九年にかけて、中立国アメリカの船を雇い、オランダの国旗を掲げさせて出島に送り込んだ。しかし、一八一〇年にナポレオンがオランダ本国をフランス直轄地として併合すると、翌年からオランダ領バタヴィアはイギリスに接収されてしまい、一八一三年にナポレオン帝国が崩壊するまで、出島のオランダ商館は孤立無援となってしまうのである。この間の出島の商館は貿易どころではなく、日本との直接交易はもっぱら中国船が担うことになった。つまり、一九世紀初頭の日本の漆器貿易は、全体の出荷量が減ったであろうし、中国船が主な取引先となると、一八世紀の『唐蛮貨物帳』の記録から類推するに、奇抜な輸出用の品よりも日本国内市場向けの製品が多く出荷されたのではないかと想像される。日本の漆器は中国市場経由でヨーロッパに運ばれたものと思われるが、革命前の美術市場のように、オランダ船によってアムステルダムに次々と入荷される蒔絵をヨーロッパ各地から集まるディーラーが落札するような活発な流通はなくなっていたと想像される。

一八一四年にオランダ祖国が解放され、一八一六年にジャワが返還されると、出島へのオランダ船来港も再開する。しかし、かつてのような会社組織による大規模な貿易はもはや行われなかった。アメリカ船が交易を行うようになってから一八四〇年代にかけては、西洋向けの輸出漆器は簡易な作りの螺鈿による大型家具を中心とした新商品が商われている。一八五四年にペリーが来航して下田が開港すると、それまでとはまったく異なるシステムで西洋人との漆器

貿易が行われるようになった。京都の高級品や長崎製の輸出漆器をオランダ人との交渉を許された一部の商人が商うのではなく、江戸や駿府の商品を不特定の商人が一斉に持ち寄るようなより自由な取引である。一八五六年には出島解放令により出島の出入りも自由になり、日蘭貿易も自由貿易へと移行していく。一八五八年にはフランスと日本の間の不平等条約、日仏修好通商条約も締結され、一八五九年には横浜と長崎が、一八六三年には神戸が列強諸国に対して開港される。先ほどのデュ・パン大佐が日本を訪れたのは一八六一年であるから、開港まもない活気に満ちた横浜の町を見たことだろう。ナポレオン三世が派遣した外交官、ギユスターヴ・デュシエール・ド・ベルクール（一八一七〜八一）は、一八五九年に日本に到着した<sup>4</sup>。日本語のできるパリ外国宣教会の宣教師、プリユダンス・セラファン・バルテルミー・ジラルール（一八二一〜六七）とエマニエル・ウジェエヌ・メルメ・カシオン（一八二八〜没年不詳）とともに来日し、日本の信頼を得たベルクールは、一八六四年に全権公使を辞して帰国する頃には老中たちに留任を求められたほどであった。デュ・パン大佐は日本滞在中このデュシエール・ド・ベルクール<sup>5</sup>の世話になつていたので、通常の外国人が簡単に収集できないような情報を『日本』に収録することができたのである。

さて、こうした日本側の状況は、パリの美術市場における日本漆器の流通に反映しているのだろうか。

マヌエラ・モスカティエツロ氏の研究によれば、一九世紀パリの公開オークションにおける日本美術の取引は、その特徴から三期に分けられる<sup>5</sup>。第一期の一八〇〇〜六〇年までは、もっぱら漆器と陶磁器を主とするという。これはおそらく旧体制のコレクションに含

まれた品の売買が中心だったということだろう。第二期の一八六一〜九〇年には、日仏修好通商条約により、日仏の直接交易が始まり、物量が各段に増えるのだという。下田や横浜や神戸の港に、日本国内の古物に加えこれまでとは異なる輸出漆器が吸い寄せられた時期である。第三期の一八九一〜九九年には、一九世紀の第一世代のコレクションの売り立てが多いのが特徴的で、日本から届く浮世絵と冊子本への注目度が増すのもこの時期だという。

モスカティエツロ氏によれば、一九世紀半ばから漆器も輸出用の大量生産品が増えるが、必ずしも質が劣るわけではないとのこと。一八六〇年代から七〇年代には、銅器や七宝の取引も増えるという。まさに幕末明治期の輸出工芸の市場が成立した時期ということであろう。

ラカンブル氏のジャポニスムに関する先駆的研究にも、ちょうどこの頃にパリに初めて日本漆器を扱う専門店が登場することが指摘されている。<sup>6)</sup>一九世紀パリの商業・産業名鑑『ディド・ボタン』において一八六一年に初めて「ラック・ド・シーヌ」(直訳すると中国の漆器。ただし一七世紀以来、日本の漆器もこう呼ばれている)の見出しのもと、日本の漆器を取り扱う茶の専門店が収録される。ブイエットの「ア・ラ・ポルト・シノワーズ」(一八二六年創業、一八八六年まで収録される)、J・G・ウーセの「オ・セレスト・アンピール」(一八七〇年まで収録)、ドセルの「ランピール・セレスト」(一八五六年には存在した)である。専門店はその後増えていく。

今井氏によれば、ティエールもちょうどこの頃にあたる一八六〇年、六一年、六四年の三回にわたって自身のコレクションから版画の売り立てを行い、その売り上げを新たなコレクションの購入資金

とし、たとえば一八六二年のデュ・パン大佐の売り立てで、高価な漆器を購入している。

モスカティエツロ氏、ラカンブル氏、今井氏の調査による一九世紀の公開売り立ての中で、日本の漆器を扱った例を挙げると以下のようになる。

一八〇二年	ジュイヨ
一八二一年	ダヴァル(「日本の漆のメダイオン」とあるのは、一八世紀末の肖像プラケットの類か)
一八二六年	フランソワ・サレ
一八二六、二七年	ヴィヴァン・ドノン(版画家で初代ルーヴル館長、一七四七〜一八二五。)中国磁器一四七点、中国や日本の漆器一二三点を含む一八世紀末〜一九世紀初頭の蒐集品が、没後の売り立てで散逸。ラカンブル氏によれば、ティエールもこのコレクションにかつてあった作品を購入している：TH403, TH413, TH407)
一八二七年	ティツィング(一七七九〜八四年の在日オランダ商館長)
一八二八年	ヌヴ(オランダ東インド会社のディーラー、ファン・ブラーム・ハウクヘーストのコレクションを売り立て)
一八三五年	A・ルブラン
一八四二年	ポール・ジニエ
一八四六年	クレティアン・ルイ・ジョゼフ・ド・ギーニュ

(在中國フランス総領事も務めた)

一八五〇年  
ルイ・フィデル・ドブリュージュ・デュメニル  
(※一八五二年  
ドウルオ競売場落成)

一八五七年  
モンテベロ公爵夫人(中国と日本の品六一三点  
という膨大なコレクションの売り立て。今井  
氏によるとティエールも少なくとも九点購入。  
TH394, TH401, TH407, TH409, TH411, TH415,  
TH417, TH431, TH445)

一八六二年  
デュ・パン大佐(清朝アヘン戦争の折の円明園  
の略奪に加わった後、日本に立ち寄って買い付  
けを行い、両国の美術工芸品を大量に持ち帰っ  
た。ティエールが草稿を所蔵していた『日本』  
の著者。ティエールも購入：TH355, TH356,  
TH444)  
ウジェーヌ・ピオ(美術史家・蒐集家)  
一八六四年  
プラタレールゴルジエ(今井氏によるとティエ  
ールも購入(TH305)  
ベリー公爵夫人

今井氏によれば、ティエールはこうした売り立てに自身で直接参  
加したわけではなく、例えば当時の東洋趣味の売り立ての四分の一  
を仕切っていた大手美術商、シジスモンド・マネームや、ド・ノリ  
ヴォ、マリネといった仲介人に購入を委託していた。

この後は、一八六七年のパリ万博もあり、日本へ直接買い付けに  
行く人々も現れ始める。

ティエールに関して言えば、第三共和政の大統領に就任していた

一八七二年二月二七日には、岩倉使節団の公式謁見を受けたり、  
その後互いに夕食会に招きあったりするなど、パリにいながらにし  
て、日本の中枢部と直接に関わる立場にあった。今井氏によれば、  
ティエール図書館には、明治四年(一八七一年)一月四日付の三  
条実美が認めた明治天皇の親書が伝わるという。

これは『明治天皇紀』によれば、使節の発遣の儀に際し、使節に  
各国首脳宛の国書が託されたうちの一通であるが、当時の明治政府  
の慣例として、このような親書が送られる場合は、まず間違いなく  
画帖、磁器、銅器、蒔絵書棚や料紙箱といった贈品を伴うので、ティ  
エールが使節団から贈品を受け取った可能性は非常に高いと思われ  
る。残念ながら、その記録はみつかっておらず、現存作品に同定も  
されていない。

いずれにしても、上記のようにティエールが東洋の美術工芸品に  
興味を持ちはじめた一八四〇年代は、日本からの新たな漆器の入荷  
はそれほど期待できず、むしろ、一八世紀の貴族たちが手放した作  
品が市場に多く出回っていたと想像できる。一九五八年の日仏修好  
通商条約の締結を機に、日本からもたらされる品々が種類も量も増  
加していき、一八六〇年代後半から一八七〇年頃には、それまでに  
輸出された蒔絵とは異なる輸出用の蒔絵が現れ始めていたととらえ  
られる。ティエールのコレクションに含まれる作品のうち、いずれ  
が江戸時代の京都製で、いずれが幕末の江戸製、あるいは明治時代  
の東京・横浜製、などとはつきり知ることができないが、ティエ  
ールの蒐集期のパリ市場に、江戸時代にすでに輸出されていた漆器が  
多く出回っていたことはよくわかった。

次節で、実際の作品の調査報告を行い、ここまで見てきた背景に

どのように合致するかを考えてみたい。

### 調査報告リスト

次に掲げる表1は、二〇一三年の一月と二二月の二回に分けてルーヴル美術館工芸部門の収蔵庫で行った調査の報告である。

冒頭の通し番号は、本誌巻頭のカラー図版12の枝番号と一致している。つまり、表の1番は、カラー図版12-1に対応しており、カラー図版には、作品の台帳番号と法量を添えてある。名称は筆者が便宜的につけた。

表の配列は順不同であるが、およその分類として、制作年が一七世紀〜一八世紀に遡りうる作品を前寄りに配し、その中で西洋の彫金マウントを施されたものをひとまとめにし、十九世紀になってフランスにもたらされたと思われるものを後ろ寄りにして、日本製ではない模造漆の作品を最後にした。

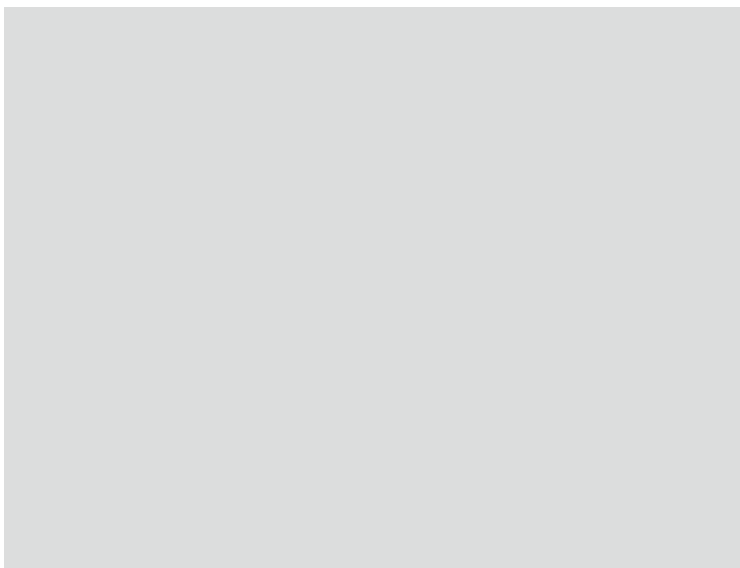
1番の盆は、残念ながら収蔵庫内でも展示室でもみつからず、ラカンブル氏と今井氏が撮影した写真を参考にした。32番は、表中にも述べたが、ティエール自身のコレクションではなく、義妹のドーナ嬢が寄贈した嗅ぎ煙草入れの一部である。日本の蒔絵のパネルをマウントした作品を収蔵ケース内のみかけたので、未調査ながら参考のためにガラス越しに撮影した写真を収録した。

49番には、50〜61番の印籠の大きさを比較しやすいように集合写真を挿入している。

表には、器物の形状、加飾技法、文様のそれぞれについて観察し得たとおりを記し、法量の後に備考欄を設けて気がついたことを簡

単に記したが、表の後に、紙幅の許す範囲でモノクロ画像を示しながら所見を述べたい。

なお、表中のBB&Aとは、ブルカンブレスとアラスで開かれた本稿冒頭で述べたラカンブル氏の展覧会に出陳されたことを示す。これらの作品は、註1に示した展覧会図録に美しいカラー写真で掲載されている。



挿図2 ルーヴル美術館収蔵庫での調査風景



11	10	9	8	7	6
葛楓蒔絵合子	菊蒔絵沈箱	唐子闘鶏蒔絵小盆	小犬蒔絵小盆	花鳥蒔絵螺鈿象嵌香筆筒	楼閣山水雉鴛鴦蒔絵香筆筒
TH387	TH428	TH430	TH429	TH431	TH395
円形、蓋のみ唐戸面取、豊付きを微かに面取、底裏を微かに削った、印籠蓋造の合子。	長方形、甲盛、塵居、印籠蓋造、二段に蓋を乗せ、底裏に直角板足をつけた箱。蓋裏が抉れているので、板は乾漆製か。下段には押し出し孔(指ぬき)があったのを塞ぎ、漆で補修している。	長方形、縁つき、底裏の四隅に直角板足をつけた盆。縁裏に水平面があり、箱の口縁にかかっていた内容品であったと判る。	長方形、縁つき、足なし。もとは小箱の内容品と思われる盆。	長方形、長側面の一方に観音開きの扉をつけ、中に五段十一個の引出しを納めた香筆筒。底裏の四方にやや内側から外に張り出す直角板足をつける。天板に提手のあった跡がある(孔を隠すため本物の珊瑚で修復してある)。最上段の引出しには、縁つき直角板足つきの香盆を納め、最下段の二つの引出しは底面に押し出し孔を開け、それぞれ長方形、印籠蓋造の小箱を二つずつ納める(挿筒9)。扉の蝶番、留め金具(掛け金具は欠失)、引出し引手は全て銀製。	長方形、長側面の一方に観音開きの扉をつけ、中に五段十一個の引出しを納めた香筆筒。底裏の四方にやや内側から外に張り出す直角板足をつける。天板に提手のあった跡がある(孔を隠すため本物の珊瑚で修復してある)。最上段の引出しには、縁つき直角板足つきの香盆を納め、最下段の二つの引出しは底面に押し出し孔を開け、それぞれ長方形、印籠蓋造の小箱を二つずつ納める(挿筒9)。扉の蝶番、留め金具(掛け金具は欠失)、引出し引手は全て銀製。
蓋表と身の側面は淡い青金梨地とし、蓋表には、金薄肉高蒔絵、絵梨地、朱漆、金・銀切金、針描、付描、内部、立上り、底裏は詰梨地、蓋裏にはさらに金平蒔絵。	蓋表から側面にかけて、金粉溜地に、金・銀・青金薄肉高蒔絵、付描、描割、針描、金具。底裏と足は黒地の多い梨地。内部、立上りは梨地。口縁と台口は金地。重箱上段の外側面の割れと、下段の底板の押し出し孔を塞ぎ、上下段の見込みに、金・青金消粉薄肉高蒔絵で後補(挿筒14・15)。	縁の表から見込みにかけて、金粉溜地に金・銀・青金薄肉高蒔絵、金付描、朱漆、黒漆、金切金、青金蒔絵かし。縁裏は、詰梨地。底裏と足は、疎らな梨地。口縁は金地。	縁から見込みにかけて、金粉溜地に金・銀・青金薄肉高蒔絵、金具、金付描、針描、銀蒔絵かし。縁裏、底裏は、詰梨地。	筆筒の外面と引出しの前面は、刑部梨地。筆筒の外面は金・銀高蒔絵、薄肉高蒔絵、付描、針描、描割、金切金、金・銀型押し片象嵌(挿筒12・13)、螺鈿、疑似珊瑚(下に朱色顔料をおいた半透明の石または貝)。香盆の縁は刑部梨地、見込みは淡い梨地とし、筆筒外面と同じ蒔絵技法で加飾。小箱外面は、金粉溜に金・銀・青金の付描、金切金。扉裏は、普通の梨地に外面と同じ蒔絵技法で加飾。内部と小箱の立上りは梨地。底裏は淡い銀梨地。面取部と扉や棚板の小口、引出しや小箱の口縁、小箱の台口は金地。	天板と四側面は非常に細かい淡い青金梨地に金・青金薄肉高蒔絵、平蒔絵、金切金、金付描、引出し表は、詰梨地に金平蒔絵。内部と底裏は、詰梨地。棚の小口、面取部、引出し口縁は金地。
蓋表は、土坡に楓、岩、蕨により葛の細道を表す。蓋裏は、忍草と薄。ただしこれはひび割れを隠すための後補か。	蓋表で一面面、長短二側面で一画面とした計三画面に、土坡に秋草(菊、薄野菊、桔梗、忍草)を描く。修復部分は菊の花や折枝。	縁から見込みにかけて、車輪松の下で闘鶏をして遊ぶ唐子五人を描く。	扇で遊ぶ子犬二匹。犬の足元に蒔絵かしで地面を表現する。	天板：岩に梅と椿、鶯一羽。扉表：同上、ただし鶯一羽、雀を加える(挿筒10)。右側面：同上、ただし鶯なし、波頭を加える。左側面：岩に松と梅、瀧と小鳥一羽、下草。背面：岩に松と梅、雀、小鳥一羽。引出し前面：菊、桔梗、小菊の折枝。扉裏：椿と梅の折枝。香盆：岩に桜、椿、楓、鉄線、夕顔、葡萄。	天板には、水辺の岩に雉子の番い、芦、猿、抽次、雲間の月。扉表は、周囲を条線で囲い、楼閣山水図に松。左右側面は囲い線なしで楼閣山水図。背面は、水辺の土坡に芦と鴛鴦の番い。引出しは、流水に桜、菊、楓、桔梗、雪の下(あるいは山葵?)、沢瀉、扇流し。
8.1	6.18 × 7.89	4.73 × 8.15	5.45 × 8.24	7.3 × 16.7	8.3 × 14.5
2.2	5.6	0.1	0.6	11.7	12.5
もとの合子は一七世紀末〜一八世紀前半。平蒔絵の文様でひび割れを日本で直してから海外へ送り出した物か。	V & A 蔵の重香合 (W.367.1910) などと同じ工房の商品。本来、一七世紀末〜一八世紀初頭の国内向けの小箱や盆などを納めた小型の沈箱であったものが破損し、それを一七世紀後半になって日本で修復し、輸出したのか。つまり、ヨーロッパで一八世紀以前のコレクションが一七世紀に伝世したのではなく、一七世紀に日本で古物を治して輸出したことを示す例か。	今井氏も内容品と推定。一七世紀末〜一八世紀の上質の蒔絵。	今井氏も内容品と推定。一八世紀前半。	BB & A. ラカンブル氏によれば、プランの記録から、モンテペロ公爵夫人(一七八一〜一八五〇)コレクションの一八五七年の売目録に記載ありとわかる。アントワネットや尾張徳川家のコレクションの筆筒や小箱と同じ技法。盆の法量は、62 × 157cm、高90cm。小箱の法量は、568 × 364cm、高262cm。一七世紀末〜一八世紀初頭。	江戸時代から輸出されることもあった国内向けの香筆筒。法量の高さは、提手を入れると130cm。奥行は、扉の摘みをのぞく。一七世紀末〜一八世紀初頭。



25	24	23	22	21	20	19	18	17
七宝繁花丸文蒔絵木瓜形箱	団扇散らし蒔絵沈箱	唐子蒔絵小箱	竹蒔絵饅頭形根付	恵比寿蒔絵小箱	葛の細道蒔絵香合	釣花入蒔絵香合	菊蒔絵香合	草花蒔絵小判形香合
TH417	TH425	TH402	TH382	TH422	TH383	TH410	TH427	TH421
木瓜形、甲盛、印籠蓋造の小箱。	隅丸長方形、甲盛、印籠蓋造、畳付きを面取りした二段重箱。上段の片隅に押し出し孔を開け、隅丸長方形。甲盛、印籠蓋造の小箱四合を納める。	長方形、印籠蓋造の小箱。	円形、饅頭形の根付。裏面中央に銀製桜花形の鏝座の紐金具を打つ。	隅丸正方形、胴張り、甲盛、塵居、合口部玉縁、印籠蓋造の箱。蓋裏の高さの割に立上りが高い。蓋裏は平らでなく抉れているので乾漆製かもしれない。	円形、饅頭形、削り底、印籠蓋造の合子。	長方形、甲盛、丸底、印籠蓋造の小さな箱。底辺も面取りするが、完全な丸面取りではない。内部は身の内も蓋裏も角がある。	長方形、甲盛、丸底、印籠蓋造、身の腰を丸く作り、丸底とするため、身と蓋の外見が同じ合子。次の「三五」と違って、内部は身も蓋も側板との境目に角がなく、緩やかに立ち上がる。	小判形、甲盛、蓋に稜線はなく、大きな丸面取りとした、印籠蓋造の小箱。身の側面も緩やかに下に向かってすぼまるので、全体で繭のような形の合子。平底。
蓋表から蓋裏、身の側面にかけて、黒漆地に金平蒔絵、金付描、金切金。内部、立上りは銀または錫粉による詰梨地。底裏は疎らな梨地。口縁と合口部は金地。	重箱の外表面は、詰梨地に金・銀薄肉高蒔絵、金・銀平蒔絵、金付描、描割、金金具、金切金、朱漆、青金付描。小箱の外表面は、金地に金・銀・青金薄肉高蒔絵、金付描、描割、朱漆。重箱の内部、底裏、立上りは詰梨地。重箱、小箱とも、口縁、合口部は金地。	蓋表は非常に細かい青金平目地に金・銀薄肉高蒔絵、金付描、金金具、金切金、黒漆、朱漆。側面は非常に細かい金・銀・青金による平目地に、金薄肉高蒔絵、金・銀平蒔絵、絵梨地。内部、立上り、底裏は、詰梨地。口縁と合口部は金地。	表は、梨地に金・青金薄肉高蒔絵、平蒔絵、金平目粉。裏は、金地に金薄肉高蒔絵、金付描。	蓋表は、荒波の中で鯛を手に雄牛の背にしがみついた恵比寿(挿図29)。側面は、白描風の「源氏物語」の「野分」(挿図32・33)と「若菜上」(挿図34・35)の帖の図。	蓋表から蓋裏、身の側面にかけては、金粉溜地とし、蓋表は、金・銀研出蒔絵(挿図30)、描割、金・銀金具。蓋裏から側面は、黒漆(挿図31)。内部、立上り、底裏は、詰梨地。口縁と合口部は金地。	外面は、斑梨地で、蓋表には金・銀薄肉高蒔絵、平蒔絵、付描。内部、立上りは、詰梨地。口縁と合口部は金地。	外面は、黒地が多く見える細かい青金粉による斑梨地。蓋表は、金・銀平蒔絵、金付描、金描割。内部は詰梨地。立上り、口縁、合口部は金地。	蓋表から身の側面にかけて、金地に金・銀薄肉高蒔絵、金付描、針描、金切金。銀薄肉高蒔絵、金付描、針描、金切金。口縁、合口部は金地。
蓋表から蓋裏、身の側面にかけて、楓、梅、水仙、撫子、椿の花丸文を散らし、余白を七宝花菱で埋める。	重箱の外表面は、花入菱繁きの地に団扇や軍配団扇を散らす。それぞれの団扇の文様は、流水に土坡、松、竹、椿、鶴亀、梅に鶯、流水に菖蒲、鷺、菊、萩、尾長鳥、土坡に雪持ち笹、南天、雀、すなわち、天板に蓬菜文様、四側面に四季を表す。小箱はそれぞれ八重桜、野薔薇、楓、水仙の折枝で、春夏秋冬を表す。	蓋表は、竹馬で遊ぶ唐子、軍配団扇を持つ唐子、風車を持ち駒馬、この先頭に立つ唐子、手綱を咥え、馬の後ろ半分を役をする唐子、傘をさしかける唐子などの行列(挿図36・43)。側面は変わり七宝花菱。	表面は土坡に竹。裏面は葉の葉。	蓋表は、荒波の中で鯛を手に雄牛の背にしがみついた恵比寿(挿図29)。側面は、白描風の「源氏物語」の「野分」(挿図32・33)と「若菜上」(挿図34・35)の帖の図。	蓋表に、葛の生い茂る山道、楓の樹の根元に置かれた笈を描き、「伊勢物語」の葛の細道を表す。	蓋表に、鎖のついた釣船花入れに、牡丹、菊、藤の花を生けた図。	菊の折枝一本。	蒲公英、蕁、鈴菜などの春の草花を三段に分けて描く。
7.1 × 7.9	12.97 × 12.27	5.90 × 8.73	5.37	7.0 × 7.0	8.68	9.45 × 6.60	7.94 × 6.05	8.05 × 5.16
4.9	8.18	2.63	2.35	3.0	1.9	1.8	1.88	3.48
蓋と身の文様が合口部で合わないで、複数個のあいだで蓋が入れ替わったものか。今井氏によるとモンテペロ公爵夫人(一七八一〜一八五六)コレクシヨンの一八五七年の売立目録に記載あり。一八世紀〜一九世紀前半。	小箱法量・3.88 × 3.62cm 高・6.00cm。一八世紀後半〜一九世紀。	一九世紀前半か。	テイエールの印籠とは時代も意匠も合わないさそうだが、附属したのか。一八世紀か。	蓋裏に「金里分」(分五ツ)などと読める墨書あり。今井氏によると一八六三年の日本と中国の工芸品の売立(一部、円明園の品を含む)の目録に記載あり。一八世紀。	蓋裏に「金里分」(分五ツ)などと読める墨書あり。今井氏によると一八六三年の日本と中国の工芸品の売立(一部、円明園の品を含む)の目録に記載あり。一八世紀。	国内市場向け。少し作りが雑なところも。一八世紀。	一八世紀末〜一九世紀。	今井氏は大きな箱の内容及と推定。一八〜一九世紀前半。

30 芦雁鉄線時絵重ね団扇形箱	29 唐子時絵料紙箱	28 樓閣山水尾長鳥時絵水注	27 七宝繁花鳥時絵提筆筒	26 花鳥時絵筆筒
TH405	TH413	TH406	TH409	TH398
<p>重ね団扇形、蓋の稜線のみ唐戸面取、印籠蓋造の箱。少なくとも蓋は乾漆製か。前面中央に西洋製の留金具をつけ、背面左右にも同技法の蝶番をつける。</p>	<p>長方形、甲盛、塵居、印籠蓋造の箱。料紙箱相当の大きさ。短側面の合口部には、奥側中央に銀製蝶番。手前側中央に銀製鍵金具をつける。手前の金具は魚々子地に唐草を蹴り彫りした日本製の金具に見えるが、奥の金具は、西洋製の日本の金具の模様を写したものである。西洋製の金具の下、蓋裏にもとの日本製の金具があり、これは蝶番ではなく、椀蓋の下辺左右に取り付けられるような小型の四角い留め具で、上部を切断され、突起を削り取られているようである。</p>	<p>底面が梅花形、胴張の胴に凹筒形の首を加え、摘みつきの置蓋を乗せ、中国風の把手と注ぎ口をつけた水注。</p>	<p>長方形、短側面の一方に片開きの扉を取り付け、底裏に外に張り出した波形の四つの板足をつけ、底辺を除く稜線を唐戸面取し（ただし扉の周りは、面取部が拡大し、扉に向かして窄まる珍しい形、中に四段の引出しを納めた小型の筆筒。天板に銀製菊花形座の提げ手をつけ、扉の右辺上下に銀製蝶番、左辺中程に鍵金具をつける。引出し引手も銀製菊花形鑲座に通ず。</p>	<p>正方形、台挿造、唐戸面取、ごくわずかに甲盛、蓋の四側面に稜花形の窓を開け、窓の口縁を玉縁とし、基部分の波形に割って四つ足を彫り出し、基部分に四段の棚を作りつけて前後に引き出せる重箱のような引出しを納めた箱。</p>
<p>蓋表の一方の団扇は、黒漆地に金高時絵、描割、金・銀平時絵、金付描、金切金。もう一方の団扇は、青金と金の粉溜地に金・青金薄肉高時絵。面取り部は青金地。側面は黒漆地に金・青金薄肉高時絵。平時絵、付描、錫片、赤い石（珊瑚）か、白い石または貝、緑の牙染めの象嵌。内部は、詰梨地。立上りと底裏は、黒漆地。</p>	<p>外面は黒漆地で、蓋表に、金・青金高時絵、付描、金・青金平時絵、黒漆、朱漆、金・銀時量かし。内部は銀粉溜（あるいは銀泥か）。口縁と合口部は金地。</p>	<p>総体黒漆地、金・銀・青金高時絵、平時絵、付描。胴の下半分にくく疎らに平日粉を散らす。描割は、赤置きからずれている。口縁は金地。</p>	<p>天板と筆筒側面および扉表、引出し表は、黒漆地に金・銀・青金平時絵、金付描。引出し内部、扉裏、足は詰梨地。扉裏は、さらに金平時絵、金付描。筆筒の内部と引出し外面は黒漆地。面取部、棚板小口、扉小口、口縁は金地。筆筒の底裏はまばらな梨地。</p>	<p>外面は、梨地に金・青金薄肉高時絵、金付描。棚の外面、および引出し外面の絵窓の外は詰梨地に金・青金薄肉高時絵、金付描、針描、描割。絵窓の内は黒漆地に銀薄肉高時絵、金切金、時量かしも加える。内部、底裏、足の内側面は詰梨地。引出しと蓋の口縁、面取部、玉縁は金地。</p>
10.2 × 15.8	37.1 × 28.9	10.6 × 16.0	9.61 × 5.57	10.5 × 10.6
11.11	11.5	12.6	7.2	14.1
<p>B&amp;A。今井氏によると、ブルタレ、ゴルジェの一八六五年の売立目録に記載あり。TH407（二連菱形の箱と同系統。一七世紀末〜一八世紀初頭。</p>	<p>蓋表には、岩場に菊、桔梗、女郎花などの秋草、子犬に魚をやる唐子、子犬に繫いだ綱を持つ後ろ姿の唐子、片手に軍配団扇を持ち、もう片手で猫（挿図53）を抱え持つ唐子（挿図54）を描く（挿図52）。地面は時量かして霞のように表現。子犬と、前二人の唐子は、南蛮文化館蔵の洋櫃とポーズが同じ。</p>	<p>樓閣山水図。松、柳、稲木、尾長鳥、蜂（後補か）、木の橋など。蓋は摘みを蕊とした菊花。把手と注ぎ口には唐草文。</p>	<p>天板と筆筒側面および扉表は、各面に稜花形の絵窓を設け、窓の外を七宝花菱で埋める。絵窓の中は、天板では梅に鶯、扉は枝垂桜、右長側面は藤、背面は竹に雀、左長側面は葡萄、扉裏は、土坡に菊と蒲公英に蝶。引出し表は、筆筒外面の絵窓の外は七宝花菱を45度回転させたもの。</p>	<p>蓋と基部分の外面は重弁の梅花（挿図50）と小松四本（挿図51）を組み合わせた花菱形を交互に置く幾何学文。棚の側板の稜花形絵窓の中は、一方が流水に社若と沢瀉（夏・挿図46）、もう一方が土坡に雪持ち笹（冬・挿図48・49）。引出し前後は棚の仕切り板の小口を含め、四段で一面とし、それぞれ稜花形の絵窓を作り、一方の絵窓の中は、岩に小松、雀、雉の番い、蒲公英（春・挿図45）、もう一方の絵窓の中は、岩に楓、菊、桔梗、女郎花（秋・挿図47）。四つの絵窓の外および引出しの左右側面には松、水仙、梅、桜、藤、桐、菖、百合、蔓草、菊、撫子、女郎花などの折枝文を散らす（挿図44）。</p>
<p>消粉に見えるところも、町中の商品っぽい。今井氏によるとモンテペロ公爵夫人（一七八二〜一八五六）コレクションの一八五七年の売立目録に記載あり。法量の高さは提げ手を除く。奥行も金具を除く。一八世紀前半か。</p>	<p>B&amp;A。ラカンブル氏によるとヴィヴァン・ドノン（一七四七〜一八二五）コレクションの一八二六年成立の売立目録に記載あり。推定一七世紀後半製）に比べて時絵がずっとシャープに見える。同じ図案で後の時代まで繰り返し制作が行われたのではないか。一八世紀の作と思われる。</p>	<p>B&amp;A。ラカンブル氏の指摘通り、各地に類似品あり。同氏によるとモンテペロ公爵夫人（一七八二〜一八五六）コレクションの一八五七年の売立目録に記載あり。一七世紀末〜一八世紀初頭の輸出用。</p>	<p>消粉に見えるところも、町中の商品っぽい。今井氏によるとモンテペロ公爵夫人（一七八二〜一八五六）コレクションの一八五七年の売立目録に記載あり。法量の高さは提げ手を除く。奥行も金具を除く。一八世紀前半か。</p>	<p>文様は古典的だが、表現が凝りすぎているようにも見える。金は良質。一八世紀末〜一九世紀ごろか。</p>



45	44	43	42	41	40	39	38
鶏蒔絵料紙箱	鶏蒔絵硯箱	吹寄蒔絵硯箱	日本橋花鳥蒔絵小箱	吹寄蒔絵蛤形香合	兜形蒔絵合子	虫蒔絵小箱	扇面色紙散らし蒔絵六角箱
TH418	TH414	TH419	TH384	TH423	TH389	TH385	TH388
長方形、蓋表のみ面取、合口部を玉縁とした、印籠蓋造の料紙箱。	木地が厚く重い。隅切長方形、被蓋造、蓋表のみ面取り、蓋のみ玉縁、やや甲盛の箱。もとは硯箱だろう。	隅丸長方形、甲盛、蓋のみ玉縁、被蓋造の硯箱。内部に硯のあった痕跡はあるが、現在は下水板ごと欠失。	二連の隅丸正方形、甲盛、印籠蓋造の箱。	蛤形、平底、印籠蓋造の合子。口縁に丸底の懸子一枚を置く。	乾漆製、兜形、印籠蓋造の小さな合子。	隅丸長方形、印籠蓋造の小箱。ただし立上りは隅丸になっておらず直角。	特に蓋が異常に重い。六角形、甲盛、印籠蓋造の小箱。乾漆製か。立上りはおそろしく曲物製。
総体黒漆地、蓋表に金・銀平蒔絵、金付描、針描、朱漆、絵梨地。口縁と合口部は金地。	外面は黒漆地とし、蓋表に金薄肉高蒔絵、金付描、針描、金・銀切金、金平蒔絵、金・銀蒔筆かし。蓋裏は、詰梨地に金・銀・青金薄肉高蒔絵、金付描、金・銀切金、描割。身の内は疎らな梨地。口縁は金地。	蓋表から蓋裏、身の側面は、黒漆地とし、蓋表に金・青金平蒔絵、描割、付描、異なる大きさの平目粉による蒔筆かし。内部は、斑梨地。底裏は、疎らな梨地。口縁は金地。	手前の箱の蓋表は、金薄肉高蒔絵、金・銀・青金の細かい粉による平蒔絵、金付描。側面は、金地。奥の箱の蓋表は、金地に金・青金薄肉高蒔絵、朱漆、銀平蒔絵、金付描、金・青金蒔筆かしなど。側面は、細かな金粉の斑梨地に細かな円く揃った金・銀・青金粉の研出蒔絵にも見える平蒔絵。内部と立上りは錫粉梨地。底裏は一段疎らな梨地。口縁と合口部は金地。	外面は、金・銀・青金薄肉高蒔絵、平蒔絵、金付描、金切金。懸子表は、金と青金の細かい粉による斑梨地に、青金薄肉高蒔絵、金・青金切金、金平蒔絵。内部、立上り、口縁、合口部、懸子裏、懸子の口縁は金地。底裏は青金地。	外面は、金・銀・青金薄肉高蒔絵、平蒔絵、金付描、金切金。懸子表は、金と青金の細かい粉による斑梨地に、青金薄肉高蒔絵、金・青金切金、金平蒔絵。内部、立上り、口縁、合口部、懸子裏、懸子の口縁は金地。底裏は青金地。	金地に金・銀高蒔絵、金金具、金付描。底辺と合口部に銀と銅の燃線。星に銀鏡。筋に銀線。前立の龍の目は玉眼。シコロ部分には金・青金平蒔絵、金金具、金付描。内部、立上り、底裏は梨地。畳付は金地。	外面は、朱色漆に銀粉を加えた木目塗りの地に、金・青金平蒔絵で忍草を散らし、金・銀・青金高蒔絵、平蒔絵、金金具、金付描で扇面や色紙を散らす。内部と立上りは詰梨地。底裏は疎らな梨地。口縁と合口部は金地。色紙などの絵梨地の金・銀粉は小さく円く揃う。
蓋表に、土坡に竹、雌雄の鶏と三羽の雛、下草類(挿図62)65。竹は土坡の向こう側から生えている。図は面取り部に及ぶ。	蓋表から面取り部にかけて、雌雄の鶏と雛(挿図59)60。蓋裏には茅葺きの屋根、竹、雀の群れ(挿図61)。	蓋表に、紅葉、松葉、梶の葉、松ぼっくりなどを散らす。	手前の箱の蓋表には、遠方に富士、蔵の並ぶ港、中景に城(江戸城か)、近景に大きな橋(日本橋か)、荷物を持つて行き交う人々。奥の箱の蓋表には、菊と鶏の番。側面には、梅樹と流水(挿図58)。	外面は、牡丹、菊、水仙、梅、桜、椿、芙蓉の花と楓の葉を吹き寄せた文様で覆う。懸子は山並みに松と雲。	龍の前立をつけた星兜の詳細を描く。真庇には波頭文様。	蓋表を条線で縁取り、蟬と蝗虫を描く(挿図56)。	蓋表から側面にかけて、色紙、団扇、扇を散らす。色紙には竹に雀、団扇には松の老樹。扇面には藤、梅、飛鶴を描く。
41.0 × 32.4	22.5 × 21.0	24.4 × 22.4	10.1 × 15.9	12.83 × 10.15	8.1 × 7.9	5.0 × 4.1	9.37
14.4	4.5	5.0	5.23	5.91	4.9	3.0	2.48
BB&A。一八世紀後半〜一九世紀前半。	BB&A。一八世紀。	一八世紀末〜一九世紀前半。	側面の梅は水墨風。錫粉梨地はオレンジ色をした東京方面の梨地。梅樹を描く小さな金・銀・青金粉も円く揃っているのが東京風。一九世紀、輸出用。	蓋裏に「殊工吉反」と読める墨書のある和紙の貼り札あり(挿図37)。一九世紀。	今井氏によるとギリシアのゴルフ国立東洋美術館に同じものがあるとのこと。一九世紀、輸出用。	今井氏は内容品と推定。中国風の箔粉による蒔絵。一九世紀後半の安価な輸出商品か。	江戸・東京方面か。一九世紀後半、輸出用。

54	53	52	51	50	49	48	47	46
六歌仙時絵象嵌印籠	布袋時絵象嵌印籠	閑古鳥時絵印籠 「松花齋」銘	梅鶴時絵印籠 「梶川作」銘	桐唐草菊時絵豆印籠	※50～61の印籠の集合写真	藤時絵料紙硯箱 古満巨柳作	萩時絵料紙箱	松梅時絵料紙箱
TH433	TH439	TH437	TH440	TH443		TH355&356	TH400	TH401
TH433と同じ小判形、隠し紐通し、四段に蓋の印籠だが、象牙製縮緬めと、乾漆製、内部布張り、饅頭形の根付け（象牙製紐通し象嵌）を伴う。	外見はTH440と同じ小判形、隠し紐通しだが、一段に蓋。煙草入れか。立上りの長辺に手掛けを有る。内箱があったか。	右に同じ。	小判形、隠し紐通し、四段に蓋をした印籠。根付、縮緬め、紐は欠失。	極小の一段に蓋をのせた印籠。珊瑚の玉縮緬め。根付けは欠失。		唐木のためかとても重い。長方形、蓋の稜線を軽く面取した、印籠蓋造の料紙箱と、被蓋造の硯箱。硯箱の内容品は欠失。	木地が厚く重い。隅丸長方形、甲盛、磨居、合口部玉縁、口縁に懸子一枚を収めた料紙箱。	長方形、底辺を除く稜線を唐戸面取、印籠蓋造、口縁に懸子一枚を納め、合口部玉縁の料紙箱。
金地、金・銀・青金薄肉高時絵、朱金、貝または獣骨の象嵌、黒漆、金付描、絵梨地に加え、珊瑚、孔雀石、堆黒片、螺鈿、切金など。瑪瑙にも梨地風の金時絵を施す。珊瑚には金平時絵と黒漆の描線。金地は下に向かって梨地となるようグラデーショナルになっている。内部と立上りは錫粉梨地。口縁と合口部は金地。	金地、金・銀・青金薄肉高時絵、朱金、貝または獣骨の象嵌、黒漆、金付描、絵梨地。内部と立上りは梨地。口縁と合口部は錫粉金地。根付は黒漆地に銀高時絵、朱漆高上げに金付描。縮緬めは銀平時絵に金付描。	金地、金・銀・青金薄肉高時絵、朱金、黒漆、金付描、絵梨地。内部と立上りは錫粉梨地。象嵌なし。口縁と合口部は金地。	金地、金・銀・青金薄肉高時絵、朱漆、朱漆。金地は下に向かって梨地となるようグラデーショナルになっている。内部と立上りは錫粉梨地。口縁と合口部は金地。	金地、金・青金薄肉高時絵、金付描、黒漆。朱漆。金地は下に向かって梨地となるようグラデーショナルになっている。内部と立上りは錫粉梨地。口縁と合口部は金地。		外面は、修理前の写真では、黒と茶の木目の見える唐木を貼った木地時絵のようだが、最近、西洋の黒色塗料で修理されてしまい、木目はほとんど見えない。唐木の上に、金・青金高時絵、金金貝、金付描、青金研出時絵、針描、螺鈿象嵌。蓋裏は、梨地に、金・銀高時絵、金・青金研出時絵、銀平時絵、玉眼など。内部、立上り、底裏は錫粉梨地。口縁は金地。	蓋表から蓋裏、身の側面にかけて、斑梨地に金・青金平時絵、薄肉高時絵、金付描、描割、銅の割合の多い金切金、細かい青金粉の蒔草かしなど。内部、立上りは、錫粉詰梨地とし、蓋裏には、金・青金薄肉高時絵、金付描、口縁、合口部、懸子の縁は金地。底裏は、疎らな梨地。	総体詰梨地、蓋表から蓋裏、身の側面にかけて、金・青金平時絵、金付描、銅の割合の高い金切金、赤銅金貝、描割、蓋裏は、蓋表と同技法に金金貝を交える。内部と立上り、懸子の内部と外側面は詰梨地。身と懸子の底裏は疎らな梨地。口縁、面取部、合口部、懸子の縁は金地。
六歌仙。根付けには鳩のような鳥、五弁花形のでんでん太鼓、やじろべえのような玩具。縮緬めは幾何学的な帯文様と破れ菱繋文。	片面は、車に乗った布袋と唐子、雲。もう一面は、唐子の獅子舞、雲。	片面は、閑古鳥、太鼓の上に雄鳥、松、葛。もう一面は、土坡に松、雌鳥一羽と雛三羽。	両面とも梅樹に鶴。林和靖の留守文様か。	菊花。踊り桐の唐草。		蓋表から蓋裏、身の側面にかけて、花を咲かせた藤の枝。蓋裏には流水に水草と鯉（料紙箱と硯箱で構図が相対する）。料紙箱には研出時絵の小さな鯉二匹も（挿図70・71）。蓋裏の左下に「古満巨柳（花押）」の金平時絵銘あり。蓋裏の文様は内側面に及ぶ。硯箱には見込みにも研ぎ出し時絵による流水と水草。	蓋表を一面とし土坡に流水、岩、萩、下草（挿図68）。蓋裏から身の側面にかけての長短二側面を、一面として、土坡に萩（挿図69）。蓋裏は、地面に梅の老樹と小松。蓋の前後を入れ替えても側面と蓋裏の合口部で文様が連続する。	蓋表を一面、蓋裏から身の側面の長短二側面を一面として、土坡に梅の老樹、小松と笹で松竹梅（挿図66・67）。蓋裏には、岩に流水、土坡に梅樹と小松。流水には梅花を散らす。
1.97 × 5.71	2.12 × 5.80	2.00 × 5.53	2.04 × 5.36	1.08 × 2.23		26.5 × 23.3	41.6 × 32.5	42.5 × 32.5
8.89	8.9	8.67	8.47	2.88		4.8	13.6	16.0
無銘。縮緬めは径120cm、高105cm。根付けは径44cm、高41cm。立上りの厚みは0.12cmと薄。紐に「ヒ舌久ク」カナに見える墨書のある和紙の札がつく。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	無銘。厚みは象嵌を含める2.220cm。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	「松花齋」の金平時絵銘。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	底裏に「梶川作」の金平時絵銘。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	付描の幅は0.25mm。立上りの厚みは0.06cm。縮緬めは径0.42、高0.31cm。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。		古満巨柳は一七九六年没。一八世紀後半。	国内向けの正統的な料紙箱。岩倉使節団の贈品の可能性はないか。一八世紀末～一九世紀前半か。	今井氏によるとモンテペロ公爵夫人（一七八二～一八五〇）コレクションの一八五七年の売立目録に記載あり。マリネがテイエールのために買い上げたとのこと。一八世紀後半～一九世紀前半。

63	62	61	60	59	58	57	56	55
象牙製松鷹蒔絵箱	象牙製雲龍蒔絵印籠	三国志蒔絵象嵌印籠 「松花斎作」銘	福祿寿蒔絵象嵌印籠	翁末広がり蒔絵象嵌印籠	神功皇后蒔絵印籠 「芝山」「梶川」銘	恵比寿大黒蒔絵象嵌印籠 「松花斎」銘	恵比寿大黒蒔絵象嵌印籠 「梶川作」銘	六歌仙蒔絵象嵌印籠
TH397	TH444	TH441	TH438	TH442	TH446	TH436	TH435	TH434
象牙製、隅丸長方形、印籠蓋造の（ただし、蓋の内側面に身の立上りと合口となる段差を設けている）箱。	象牙製、長方形、四段に蓋の印籠。蓋天板と底裏の短辺を面取りする。両短側面中央に紐通し穴を設ける。内部に内容物の痕跡あり。紐は青い絹の細い丸紐。縮緬めは、オレンジと透明のガラス質による切子形のトシボ玉。	右にほぼ同じだが、稜線がはっきりして、肩が張っている。	右に同じ。	「TH35」に同じ小判形、隠し紐通し、四段に蓋の印籠。	右に同じ。やや小降り。	右に同じ。	「TH35」と同じ小判形、隠し紐通し、四段に蓋の印籠。	「TH35」と同じ小判形、隠し紐通し、四段に蓋の印籠。やや小降り。
金・青金高蒔絵、薄肉高蒔絵、金切金、金・銀付描、黒漆、朱漆、茶漆、螺鈿、珊瑚象嵌、牙染め象嵌、真鍮または金銅釘、裏彩色を施し表面を毛彫りした水牛角（？）の貼り付け。蓋の稜線は青金地に金平蒔絵。	茶漆、朱漆、金・青金薄肉高蒔絵、金付描、黒漆、珊瑚など。	金・銀研出蒔絵、金・銀薄肉高蒔絵、金切金、金箔押し、金・青金付描、螺鈿、牙染め象嵌、黒漆、細かい梨地。内部と立上りには錫粉梨地。口縁と合口部は金地。	部分的に梨地・金地、金・銀・青金薄肉高蒔絵、貝または獣骨の象嵌、黒漆、金付描、絵梨地。内部と立上りには錫粉梨地。口縁と合口部は金地。	「TH33」にほぼ同じ。ただし朱金なしで、部分的に梨地・金地、金・銀・青金薄肉高蒔絵、貝または獣骨の象嵌、黒漆、金付描、絵梨地。内部と立上りには錫粉梨地。口縁と合口部は金地。	「TH33」に同じ。ただし絵梨地なし。金地、金・銀・青金薄肉高蒔絵、朱金、貝または獣骨の象嵌、黒漆、金付描、絵梨地。内部と立上りには錫粉梨地。口縁と合口部は金地。	「TH33」に同じ。金地、金・銀・青金薄肉高蒔絵、朱金、貝または獣骨の象嵌、黒漆、金付描、絵梨地。内部と立上りには錫粉梨地。口縁と合口部は金地。	「TH33」に同じ。金地、金・銀・青金薄肉高蒔絵、朱金、貝または獣骨の象嵌、黒漆、金付描、絵梨地。内部と立上りには錫粉梨地。口縁と合口部は金地。	「TH33」に同じ。ただし朱金でなく「朱貝」・金地、金・銀・青金薄肉高蒔絵、貝または獣骨の象嵌、黒漆、金付描、絵梨地。内部と立上りには錫粉梨地。口縁と合口部は金地。
蓋表は、蟬、天道虫、蠅、蜘蛛、鉄虫。蓋の稜線には麻葉文の帯文様。蓋裏から身の側面にかけては、土坡に松と梅、鷹、雀。	蓋表から蓋裏、各段の四側面にかけて、三本爪で宝珠を掴む龍一匹と瑞雲を描く。	片面は、卓の上で香を焚く唐人物、劉備、岩、花をつけた桃樹、下草、雲。もう片面は、やはり花をつけた桃の木のみだに立つ、真っ赤な顔した武人（関羽）と眼を見開いた丸顔の武人（張飛）。すなわち「三国志」の「桃園の誓い」。	片面は、土坡に松、梅、鹿に寄りかかる福祿寿雲。もう一面は、松、梅、雲、鶴、唐子。	片面は能の「翁」。もう一面は狂言の「末広がり」。番傘をさす片足立ちの太郎冠者と、扇を持ち冠をつけた長い袴の主人衣、袴は蕪の文様。	敷物の上でまじろむ官人。弓矢を手に、雲に乗り、降りてくる天女。（神宮皇后と応神天皇か。）	右に同じ。	片面は恵比寿、もう片面は大黒。	右に同じ。ただし、六歌仙の衣服の文様が異なる。根付と縮緬めはない。
6.11 × 7.18	4.82 × 2.11	5.55 × 2.03	2.08 × 5.80	2.11 × 5.61	5.68 × 2.11	2.01 × 5.63	2.08 × 5.55	2.10 × 5.41
11.88	5.15	8.61	8.63	8.53	8.14	8.34	8.49	8.65
一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	一八六〇年頃。	底裏に「松花斎作」の金平蒔絵銘。劉備の面に「三」の貼り札。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	無銘。象嵌込みの厚みは2.1cm。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	無銘。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	底裏に「芝山」の線刻のある長方形螺鈿片を象嵌。「梶川」の金平蒔絵銘。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	底裏に「松花斎」の金平蒔絵銘。内部に「三」と書かれた札あり。厚みは象嵌を入れると2.06cm。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	底裏に「梶川作」。厚みは象嵌を入れると2.02cm。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	無銘。厚みは象嵌を入れると2.02cm。一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。

67	66	65	64
楼閣山水花鳥人物蒔絵およびヴェルニ・マルタン筆筒	花鳥ヴェルニ・マルタン変則八弁花形箱	象牙製魚尽くし蒔絵香篋	象牙製蒔絵香合または紅板
TH420	TH408	TH399	TH377
長方形、観音開き、二枚扉の筆筒。内部には可動棚を設け、扉裏は寄木細工仕上げとする。脚部は19、20世紀末、軽く柔らかな白い松のような木材で造り、黒い塗料を塗る。虫損により破損。	乾漆のような、バビエ・マシエ（紙胎）のような素材を黒色塗料で固めた、甲盛、印籠蓋造の合子。素地は中国製かフランス製。変則的な八弁花（木瓜形の谷間に小さな一弁を入れる）形。	象牙製、長方形、唐戸面取、長側面の一方に観音開きの扉をつけ、中に三段の引き出しを納めた小型の筆筒。隅金具、蝶番、扉の留め金具、引出し引手は銅製鍍銀か。引出しは、前面のみ象牙製で残りは木製、漆塗、梨地風。	象牙製、長方形、甲盛、蓋の長側面に浅い半裁木瓜形の手掛けを削った、被蓋造の平たい小箱。底裏中央に押し出し孔（指ぬき）を穿つので、本来は内に小箱があったものか。蓋の長側面の一方は破損。（底は船底風に反っているのは後の狂いらしい）。
表面は蒔絵と数世代のヴェルニ・マルタンが複雑に入り交じっている様相。	総体黒色塗料の地に金、青金、銅の色をした金属粉を用いた高上げを伴うヴェルニ・マルタン。表面にはアリエータリンドグが見られ、金の高上げが剥けたところに白っぽいベージュの下地が見える。	金・銀・青金薄肉高蒔絵、朱漆、金・青金付描など。面取部は金平蒔絵。引き出しの左右側面、背面、底板表裏、口縁は、梨地だが、銀色の箔粉に近い薄い粉で研がれていない。	蓋表は、金平蒔絵、朱漆、茶漆、青漆に加え、銀粉または銀箔を型に入れ、そこに鎔漆を入れて菊花形を彫像した部品の象嵌。この象嵌は部分的に潰れているので構造を観察できる。
楼閣山水花鳥人物図。 添付画像の顔の部分はヴェルニ・マルタン。	蓋表は、遠景に山と欄と家、近景に水辺の雁三羽、芦のような草。側面には夕顔のような植物、牡丹のような植物と小禽。	筆筒天板、扉を含む四側面に鯛、鯉、飛魚、河豚、鯖などの魚と、貝、笹、水仙、桜、サクラソボなどを散らし、扉裏には、岩、草、雲と鳥を表す。引出し前面は、撫子、薄、女郎花と小禽を描く。面取部は雷文と、唐草を交えた雷文。	菊、桔梗、萩、忍草の花束。
36.3 × 97.5	6.65 × 9.23	5.09 × 7.30	3.53 × 7.58
54.0	3.76	6.17	0.93
一八世紀後半～一八七七年。	一八世紀のバリ製の作品ではないか。	一八六〇年頃～一八七七年、輸出用。	一八六〇年頃～一八七七年。

ここで稿末のモノクロ挿図について、これらの作品を取り上げた理由をまとめて説明しよう。2番の「仙人蒔絵重ね菱形箱」(TH407) (挿図3)は、画題が判明しないが、わざわざ蒔絵で表現しているものなので、長寿などを象徴する吉祥文ではないかと思われる。3番の「秋草雉子蒔絵小箱」(TH411)は、展覧会に出陳されるにあたり西洋のニスで手入れをほどこされたため、独特の光沢をしているが、錫製と思われる花びら形の金属片の象嵌が、デンマーク王室の作品と共通するので比較のために拡大画像を収録する。4番「花鳥蒔絵沈箱」(TH404)はカラー画像では棗形の合子の形がわからないので展開図(挿図5)を載せ、棗形小合子の合口部の文字の一例(挿図6)を紹介する。デンマーク王室コレクションとの比較のため、拡大画像も載せるが(挿図7・8)特に梅花形の金属片の象嵌は、挿図12、13などで見られる技法の早い例と思われる。一九世紀になると図12-64のように薄い箔か粉で行われるようになる型押し片の、系譜を追えそうである。7番「花鳥蒔絵螺鈿象嵌香箆筒」(TH431) (挿図9・13)は、各地に同技法の小箱や小さな棚、箆筒が伝わる。型押し片には数種類の型があるが、この技法を考えるために拡大画像での比較を行う(挿図12・13)。掲載した二つの梅花形は、蕊のつぶれ方がやや異なるものの、同じ型で作ったものと判断できそうである。10番の「菊蒔絵沈箱」(挿図14・15)は、押し出し孔を塞いでいる菊枝の技法が問題である。見たところ、一九世紀の消粉蒔絵に見えるので、日本で不完全な古物の孔を塞いで外国に一八七七年以前に輸出したと思えるのだが、菊の描き方があまり古典的でないところからこの枝菊をフランスのヴェルニ・マルタンと考えることもできるのである。目視での判断には限界がある。13番「網代垣

に木菟蒔絵香道具箱または茶箱」(TH386) (挿図16・18)は、図が珍しい。15番「鳶の細道蒔絵沈箱」(TH392) (挿図19・21)では、笈に描かれた鹿の研出蒔絵の細かさ、紫外線によるダメージの大きさを確認したい。16番「唐子蒔絵沈箱」(TH426) (挿図22・28)は、図に工夫があり、蒔絵も申し分ないので拡大図で詳細をご覧いただきたい。21番「恵比寿蒔絵小箱」(TH422) (挿図29・35)は、文様や選ばれた技法の組み合わせが珍しい。23番「唐子蒔絵小箱」(TH402) (挿図36・43)の唐子たちは大変個性的な顔をしているので、今後よく似た作品が現れた場合に備えて比較のために全員の拡大図を掲載する。26番「花鳥蒔絵箆筒」(TH398) (挿図44・51)は、箆筒と命名したものの、台挿造の箱のようでもある。蒔絵が入念なので、拡大図を掲載した。29番「唐子蒔絵料紙箱」(TH413) (挿図52・54)は、一七世紀の洋櫃に施された高蒔絵に比べると、ずいぶんと線がシャープに見える。挿図55と57はそれぞれ墨書の拡大図。39番「虫蒔絵小箱」(TH395) (挿図56)も文様が珍しい。あまり上等でない蒔絵によつてこのような虫を描いた箱の用途は、蒐集対象以外にあったのだろうか。42番「日本橋蒔絵小箱」(TH384) (挿図58)については、このような作品こそ、開港以後の新輸出漆器ではないかと思われるのであるが、いかがだろう。44番「鶏蒔絵硯箱」(TH414) (挿図59・61)と45番「鶏蒔絵料紙箱」(TH418) (挿図63・65)は、同じ鶏でもずいぶんと蒔絵の表現が異なっている。44番の蓋裏の雀の顔(挿図61)などは、南蛮漆器に描かれた鳥の正面顔と同じくらい漫画風である。料紙箱の方はずいぶんと淡泊な表情をした鶏たちである。46番「松梅蒔絵料紙箱」(TH401)は、一八五七年にはモンテペロ公爵夫人の没後の売り立てに出品されているので、それ以前にフラン

スに渡っていたことになる箱であるが、角の面取部の描割の仕方が独特で丁寧であるところを拡大画像で披露する。47番「萩蒔絵料紙箱」(TH400) (挿図68、69)は国内で良家の調度として伝わっていたとしてもまったく違和感のない正統的な蒔絵の仕事を観察することができる。もしも、岩倉使節団が蒔絵の品を贈呈していたとして、それがルーヴルに寄贈されたティエールのコレクションに残っていたとしたら、この作品が一番蓋然性が高そうに思えるものである。

最後の挿図は少し詳しく説明しよう。

48番「藤蒔絵料紙硯箱 古満巨柳作」(TH355&356)は、落款に加え蓋裏の研出蒔絵(挿図70、71)を見れば、真作で間違えないと思える品である。この作品は唐木が分解してしまっていたのを展覧会のために修理をしたときに、なぜか木目が見えなくなるような黒色系統のニス塗られてしまったため、外面の木地蒔絵は大変残念なことに台無しになったと言わざるを得ない状態にある。このような江戸時代の名工の作品は、料紙硯箱という格式の高い道具であることも考え合わせると、しかるべき筋からの古物としての贈品であると考えたくなるのだが、この作品は、デュ・パン陸軍大佐の売立目録に、清朝末期の円明園からの略奪品とともにはっきりと描写されている。ラカンブル氏は、デュ・パンがその著書で述べているような、外国人に向けて古美術品を売りに来る日本人商人から、デュ・パンが買ったものだろうと推定されている。その可能性も考えられなくはないが、しかし、いくら商売のためとはいえ、派手な輸出用の蒔絵でも喜んでもらえる客に対し、国内の嗜好みの作品をわざわざ売ることがあったのだろうか、と疑問を覚えなくもない。そこで、あと二つの可能性を考えてみたい。

ひとつは、ティエールの寄贈作品の目録を作成したブランが述べたとおり、この作品が円明園にあったという可能性である。清朝の皇帝も日本の蒔絵を好んで集めていたから、気の利いた在日中国人商人たちのネットワークによって、名工による調度品が北京へもたらされたという筋書きもありえるのではないか。古満巨柳と乾隆帝は没年が同じなので、まったくの同時代人である。

もうひとつの可能性は、幕府老中たちに覚えも高かった幕末のフランス全権公使ギユスターヴ・デュシエーヌ・ド・ベルクルのルートである。デュ・パン大佐が、上等な商品を扱う道具屋に囲まれる機会があったのも、本人が書き記しているとおり、デュシエーヌ・ド・ベルクルのおかげだが、ここで考えたいのは、商品としてではなく贈品としてもたらされた可能性である。先にも述べたように、この料紙硯箱は、その性質から外国人用の商品というよりは贈品である方が自然であるのだが、デュシエーヌ・ド・ベルクルのような立場の人物こそ、こうした品を贈られるには大変ふさわしいのである。しかし、都合の悪いことに彼は一八六四年まで公使を勤めているので、職を辞すときの贈品だとしたら、デュ・パンの帰国に間に合わなくなってしまう。何か別に記念品を贈られるような機会はなかっただろうか。それをデュ・パンに譲るような動機はなかったのだろうか。想像の域を出ないので、今後関連文献がないか調べてみたい。

なお、カラー図のうち、図12-40あたりから図12-65までは、一八六〇年以降、一八七七年までの新たな輸出漆器と考えて良さそうに思える品々である。江戸東京製なのか、京都製なのか、あるいはまた別の産地の品なのか、見極められるようになるのが課題である。

## おわりに

以上のように、アドルフ・テイエールの蒔絵コレクションは、江戸から明治へと時代が移り変わるその過渡期に成立し、また散逸することなく現在に伝わった数少ない例である。コレクション成立の背景を知った上で、作品を見通すと、時代を反映して、ヨーロッパ絶対王政期のコレクションに準ずるような内容に、新たな漆器が少し加わり始めているように思えることができそうである。現段階では、憶測や推定の域を出ないことが多く、このコレクションが含む情報を十分に活かすことはできていないが、今後個々の作品をほかの蒔絵コレクションと比べながら、より正確にこのコレクションの位置づけを試みたいと思う。まずは調査報告という形で情報を整理し、蒔絵の特徴から言えることを所見として加えた。足りない点も多いと思うが、研究資料、研究課題として共有できれば幸いである。

### 〈註〉

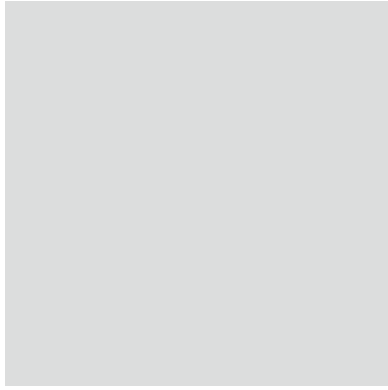
- 1 Geneviève Lacambre: Briat-Philippe, Magali: Deschamps-Tan, Stephanie. *L'Or du Japon*. IAC Éditions d'Art, avril 2010.
- 2 Tomo Imai *La collection d'Extrême-Orient d'Adolphe Thiers au Musée du Louvre*. Mémoire détude (2ème année de 2ème cycle) présenté sous la direction de Professeur Dominique Jarrassé, Madame Geneviève Lacambre et Monsieur Philippe Malgouyres. École du Louvre. Septembre 2011.
- 3 本節の内容については、前註の今井氏の仏語論文を参照した。テイエールの政治家としての経歴については、以下の研究を参照した。高

村忠成「アドルフ・テイエールの政治軌跡(1)」『創価法学(創立一〇周年記念号)』第一〇巻第二、三号合併号、創価大学、一九八〇年一月・一五―一六八頁。高村忠成「アドルフ・テイエールの政治軌跡(2)」『創価法学』第一〇巻第四号、創価大学、一九八一年二月・一五三―一七四頁。

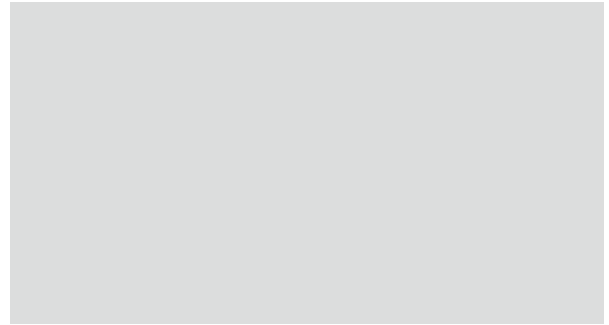
- 4 デュシエーヌ・ド・ベルクールについては、西堀昭「初代フランス特命全権公使ギユスターヴ・デュシエーヌ・ド・ベルクールについて(1)」『横浜経営研究』第XIII巻第4号、横浜大学、一九九三年のほか、東京大学史料編纂所の公開データベースを参照した。
- 5 Manuela Moscatello. "A craze for auctions: Japanese art on sale in 19<sup>th</sup> century Paris." *Andon*, no.90, Society for Japanese Arts, den Haag, 2011: pp.22-45.
- 6 Geneviève Lacambre. "Chronologie". Ministère de la Culture et de la Communication. *Le Japonisme*. Éditions de la Réunion des musées Nationaux. Paris 1988.

### 〈付記〉

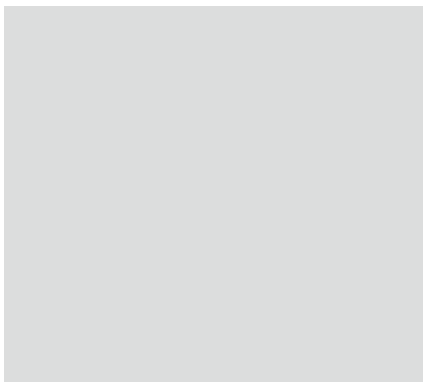
この調査を最初にご提案くださり、調査結果を公にすることを熱心に勧めて下さった前ルーヴル美術館工芸部長マルク・バスク氏、二度にわたる調査で寛大なご対応をくださった学芸員のフィリップ・マルゲイル氏、常に有益な情報を与え続けて下さるジュヌヴィエーヴ・ラカンブル氏、大部の修士論文を日本にお送り下さり、一月の調査では調書の聞き書きを担当して下さいました今井朋氏に、この場を借りて心より御礼申し上げます。本稿に含まれる画像はすべて筆者が撮影しました。本稿は科学研究費補助対象、若手研究(A)「内外伝世品の調査ならびに比較に基づく京都製蒔絵の歴史的研究」(研究課題番号23682003)の成果の一部です。



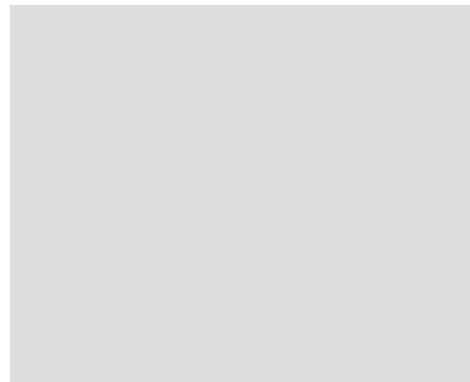
挿図4 TH411 (図12-3) 錫製花弁形金具(修復ワニス塗り)



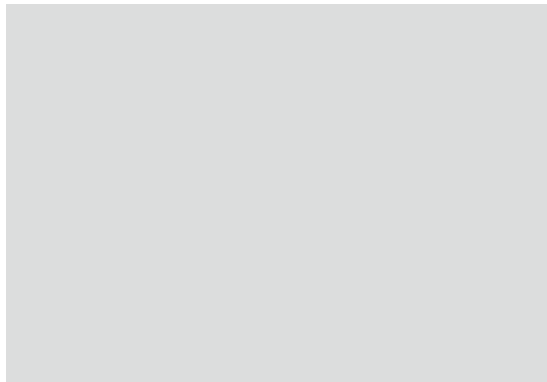
挿図3 TH407 (図12-2) 未同定の仙人図



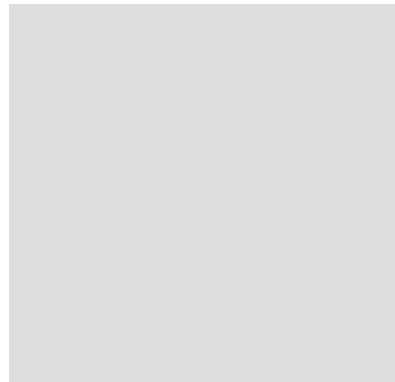
挿図6 同右 棗形小合子の合口部の印



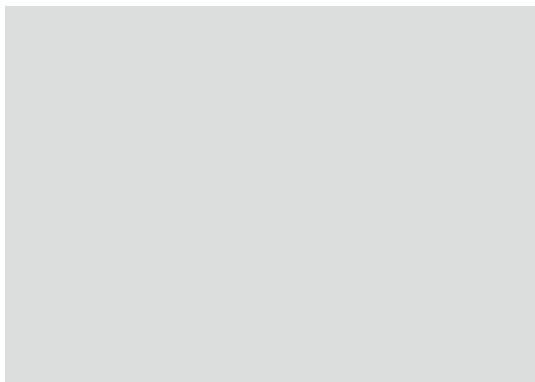
挿図5 TH404 (図12-4) 棗形小合子



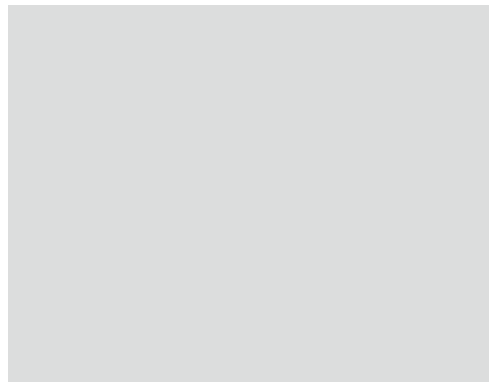
挿図8 同上 銀型押し片の象嵌



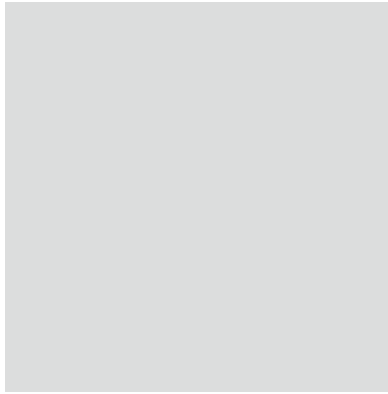
挿図7 同上 岩の上の小禽



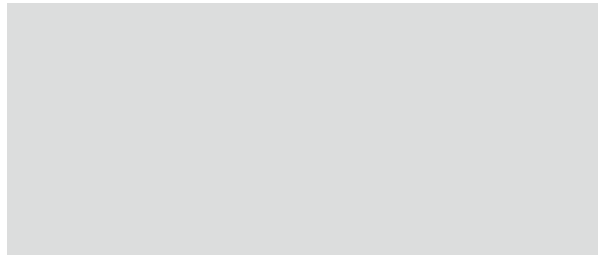
挿図10 同右 扉表



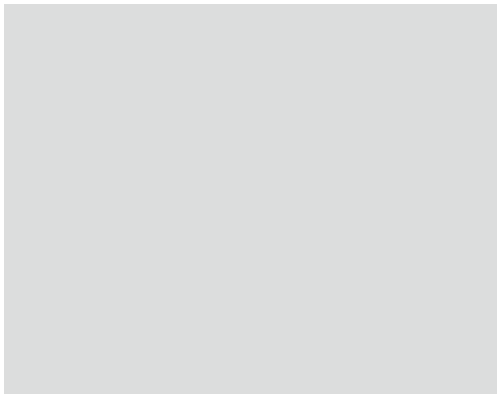
挿図9 TH431 (図12-7) 引出しの構成



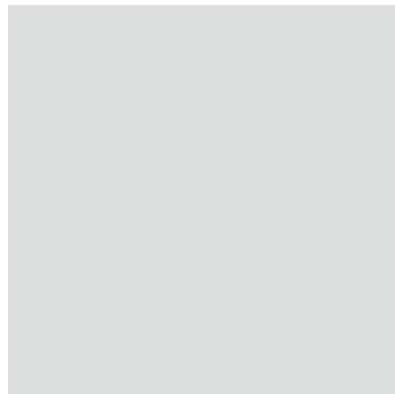
挿図12 同右 型押し片の象嵌その1



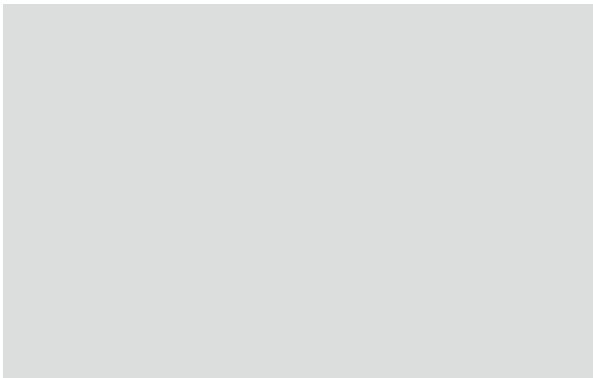
挿図11 同前 盆表



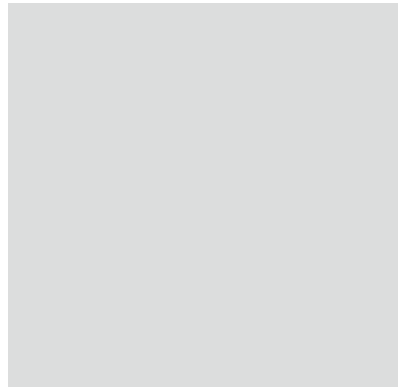
挿図14 TH428 (図12-10) 下段見込みの修復



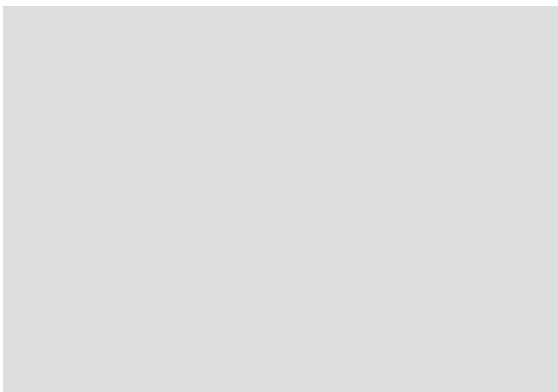
挿図13 同上 型押し片の象嵌その2



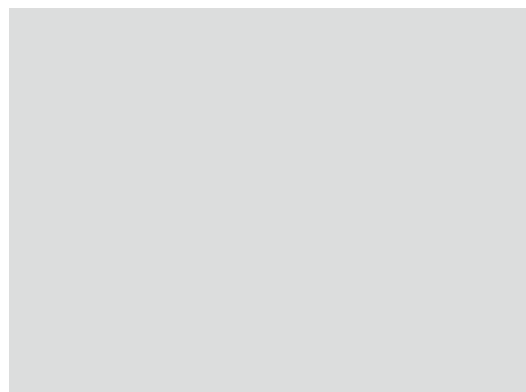
挿図16 TH386 (図12-13) 蓋表



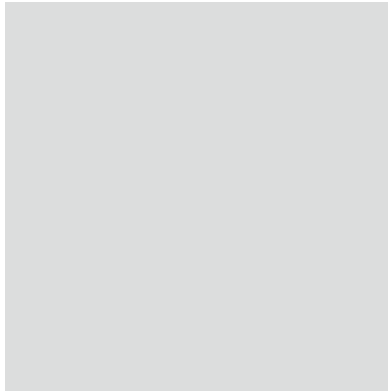
挿図15 同前 上段見込みの修復拡大



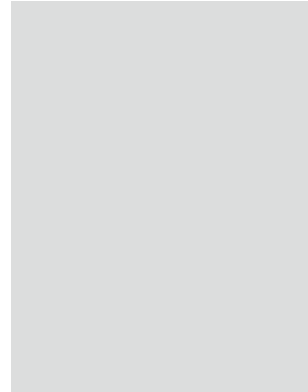
挿図18 同上 側面の籬に夕顔



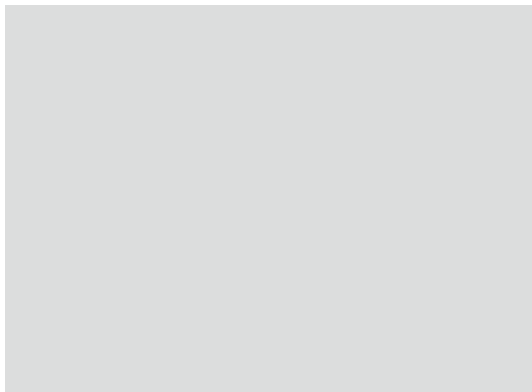
挿図17 同前 蓋表の木菟



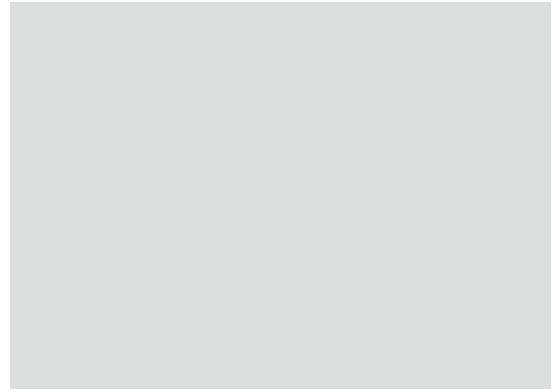
挿図20 同右 筴に描かれた鹿



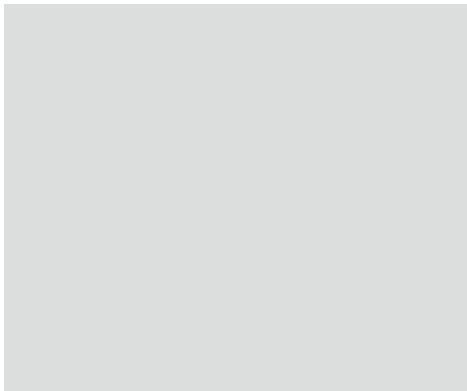
挿図19 TH392 蓋表の筴



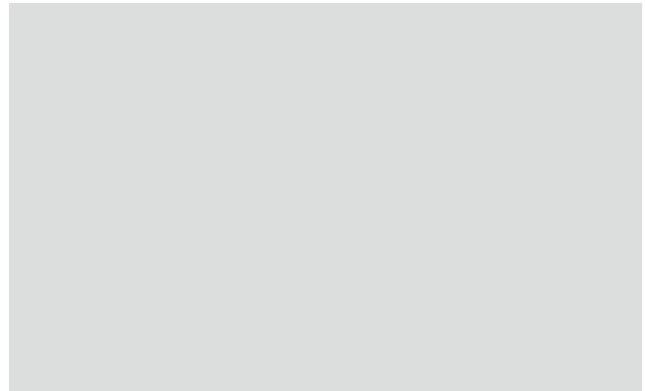
挿図22 TH426 (図12-16) 蓋表



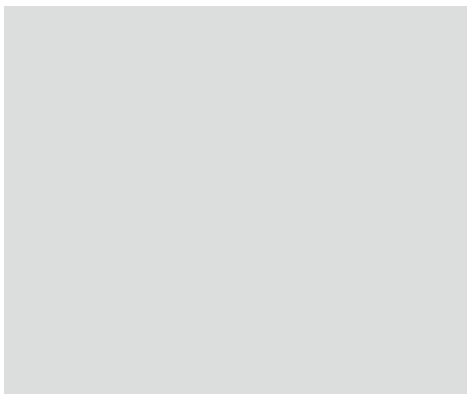
挿図21 同上 重箱側面の変色



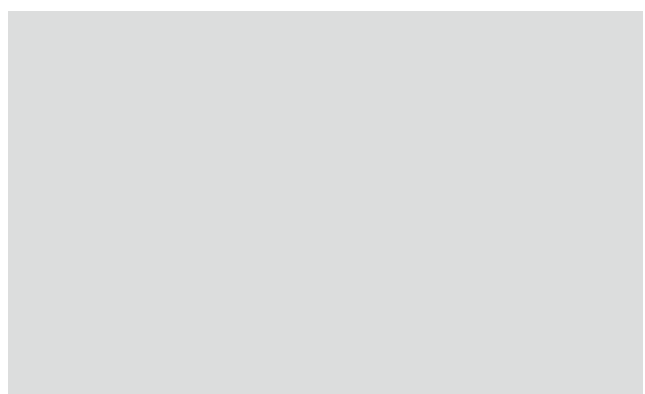
挿図24 同上 蓋鬣 2



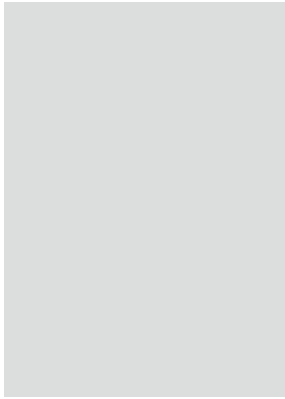
挿図23 同前 蓋鬣 1



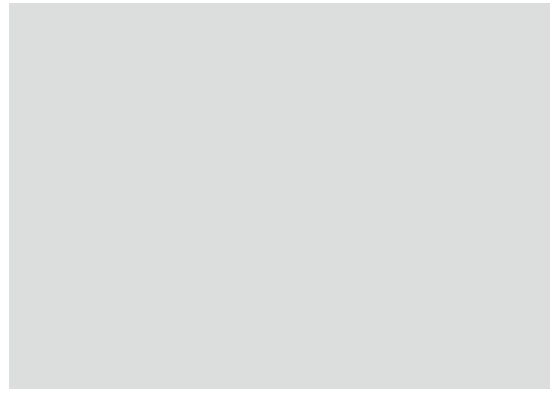
挿図26 同上 蓋鬣 4



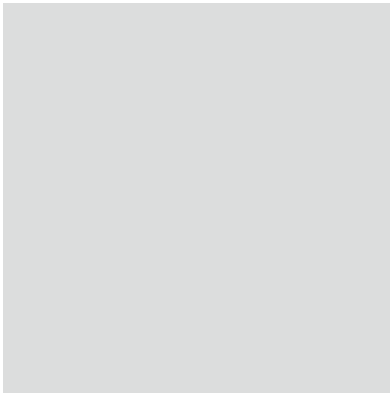
挿図25 同上 蓋鬣 3



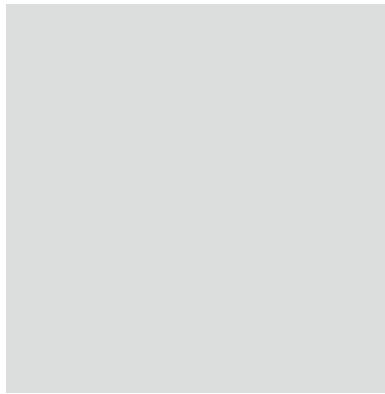
挿図28 同右 小箱の蓋表



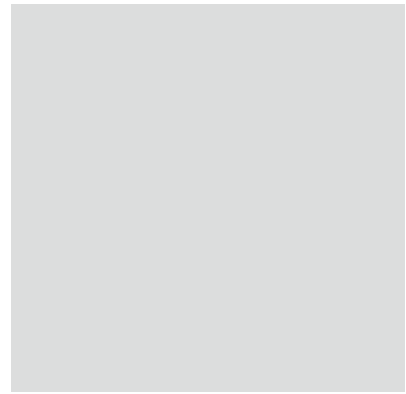
挿図27 同前 盆見込みの楼閣山水図



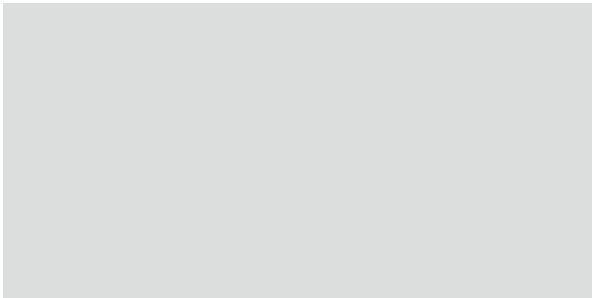
挿図31 同右 側面の金地に黒漆  
絵の拡大



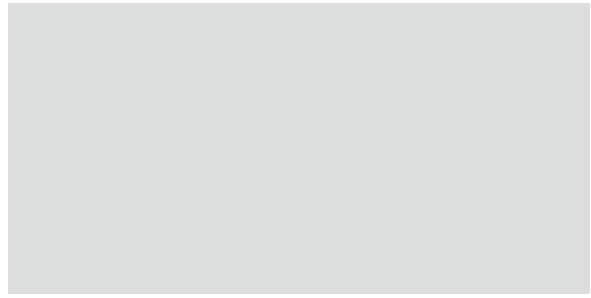
挿図30 同右 恵比寿の顔の拡大  
(研出蒔絵)



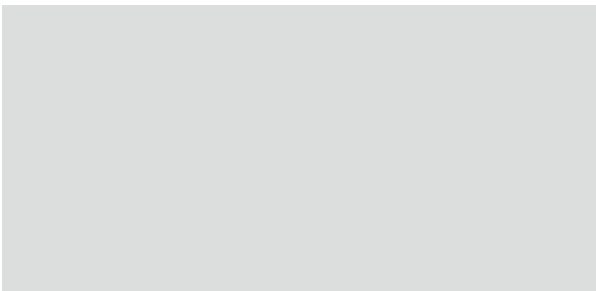
挿図29 TH422 (図12-21) 蓋表の  
雄牛に乗る恵比寿



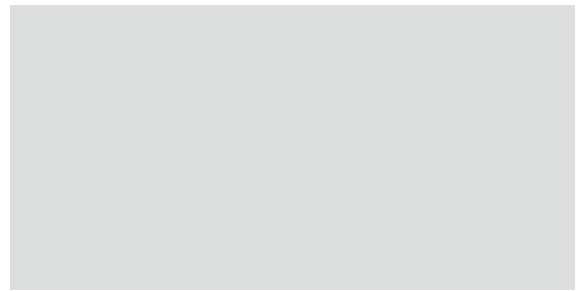
挿図33 同上 側面の絵の連続



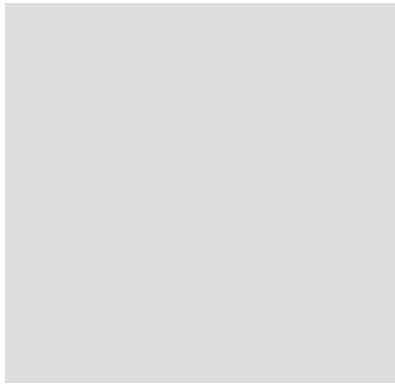
挿図32 同上 側面の野分の図



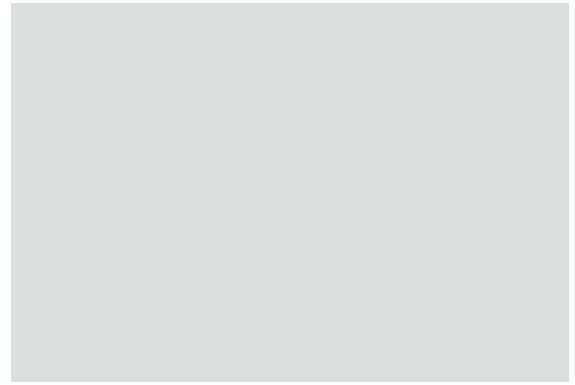
挿図35 同上 側面の絵の連続



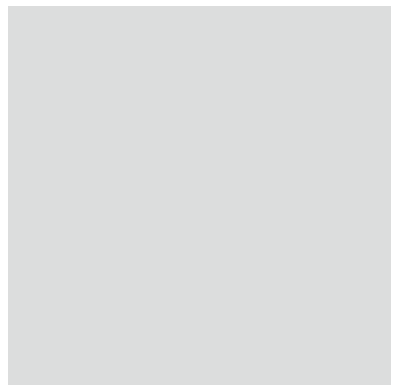
挿図34 同上 側面の若菜上の図 (金地に黒漆絵)



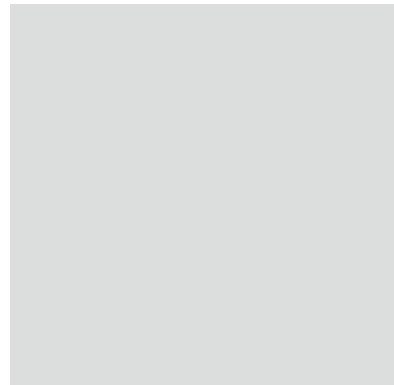
挿図37 同右 唐子の顔 1



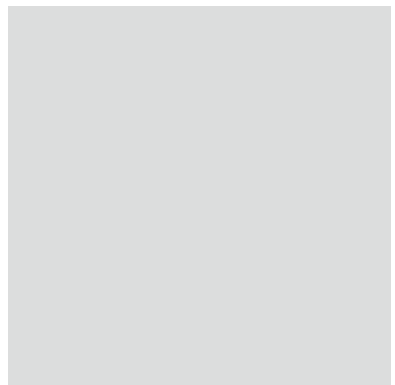
挿図36 TH402 (図12-23) 蓋表の唐子図



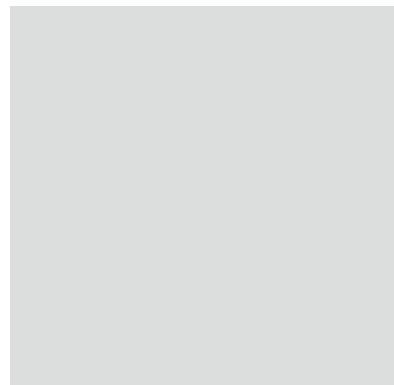
挿図39 同上 唐子の顔 3



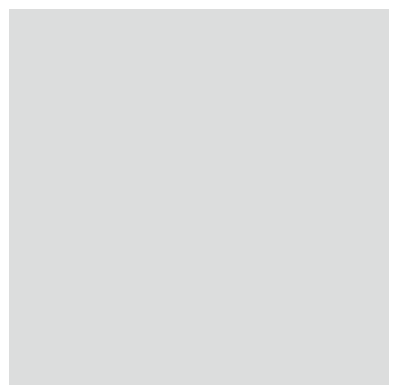
挿図38 同上 唐子の顔 2



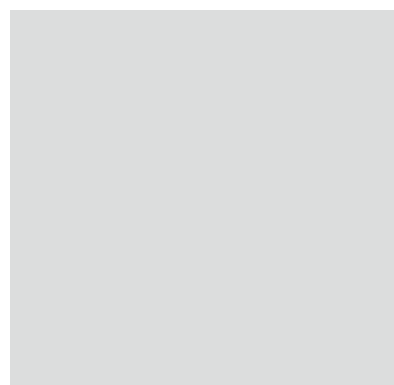
挿図41 同上 唐子の顔 5



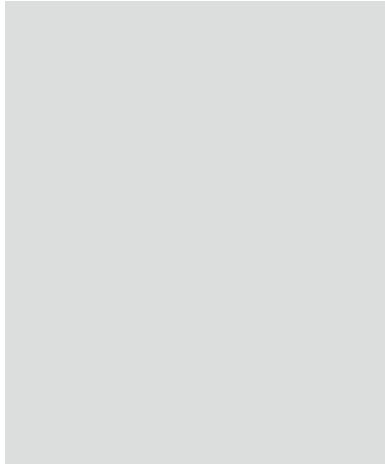
挿図40 同上 唐子の顔 4



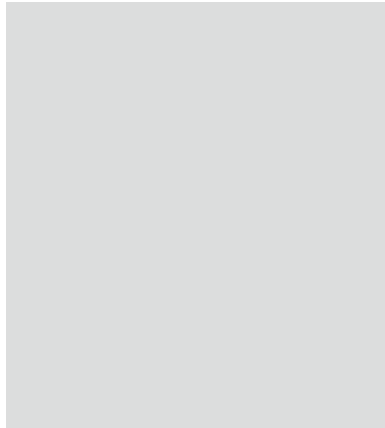
挿図43 同上 唐子の顔 7



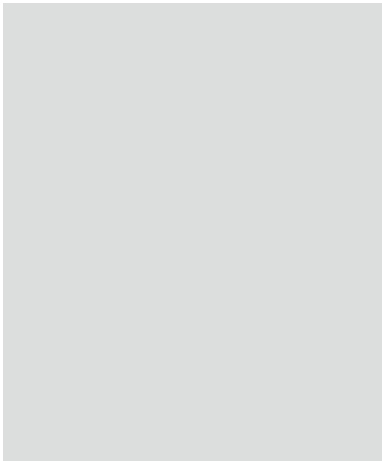
挿図42 同上 唐子の顔 6



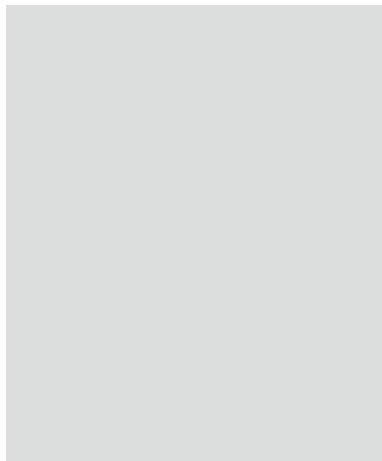
挿図45 同右 棚に収まった引出しの側面 (春)



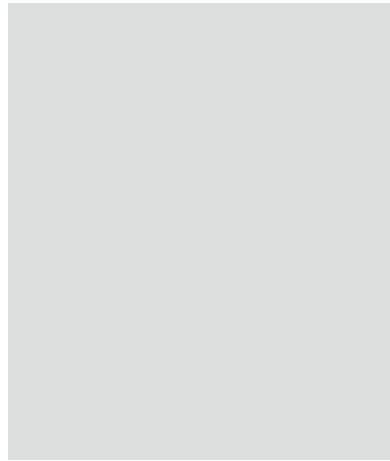
挿図44 TH398 (図12-26) 引出し側面の花枝文



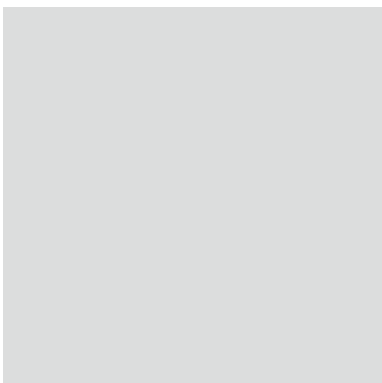
挿図48 同上 棚の側板 (冬)



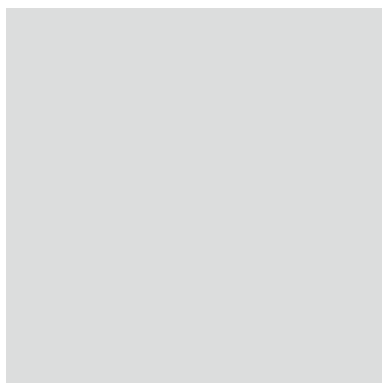
挿図47 同上 棚に収まった引出しの側面 (秋)



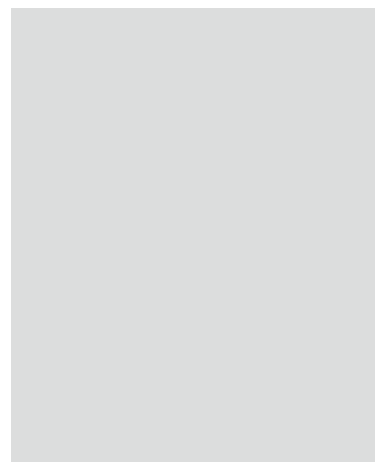
挿図46 同上 棚の側板 (夏)



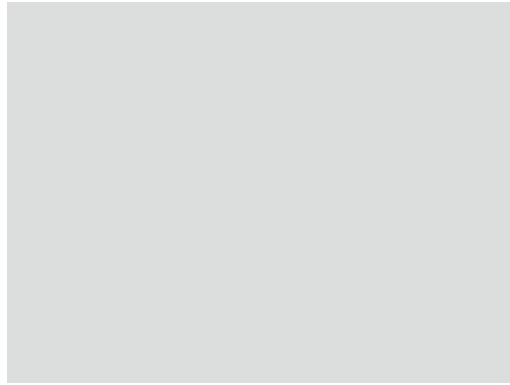
挿図51 同上 蓋の外面の小松文様



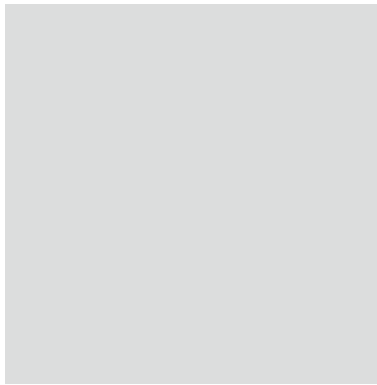
挿図50 同上 蓋の外面の梅文様



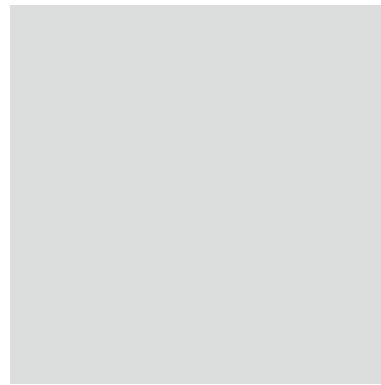
挿図49 同上 蓋を被せた筆筒の側面 (冬)



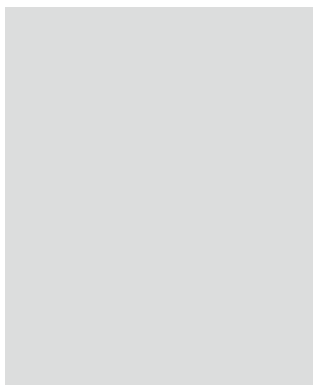
挿図52 TH413 (図12-52) 蓋表の唐子図



挿図54 同上 唐子の顔の拡大



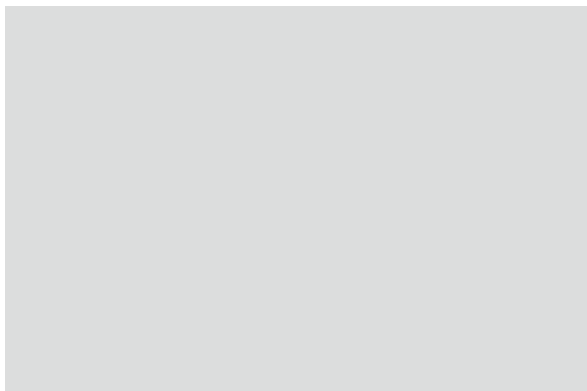
挿図53 同前 猫の顔の拡大



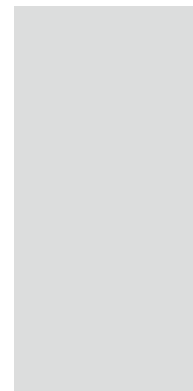
挿図56 TH385 (図12-39)  
蓋表の蟬と蝗虫



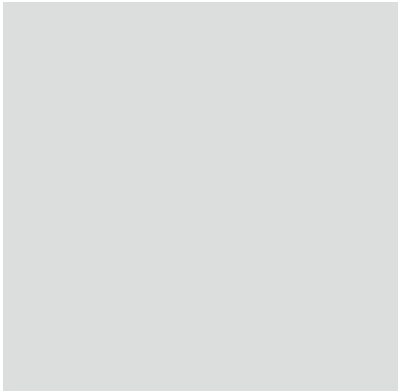
挿図55 TH432 (図12-33) 箱の中の札



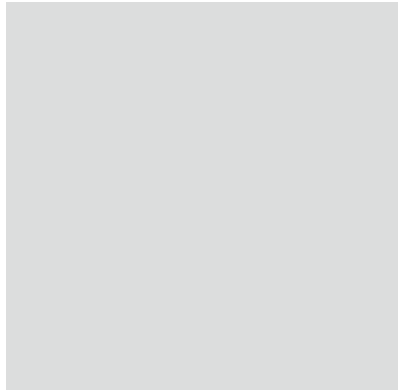
挿図58 TH384 (図12-42) 蓋表の日本橋および菊と鶏の図



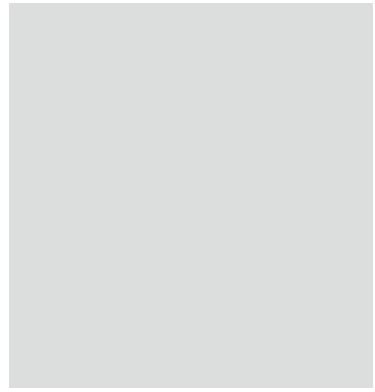
挿図57 TH423 (図12-41) 蓋裏の貼り紙



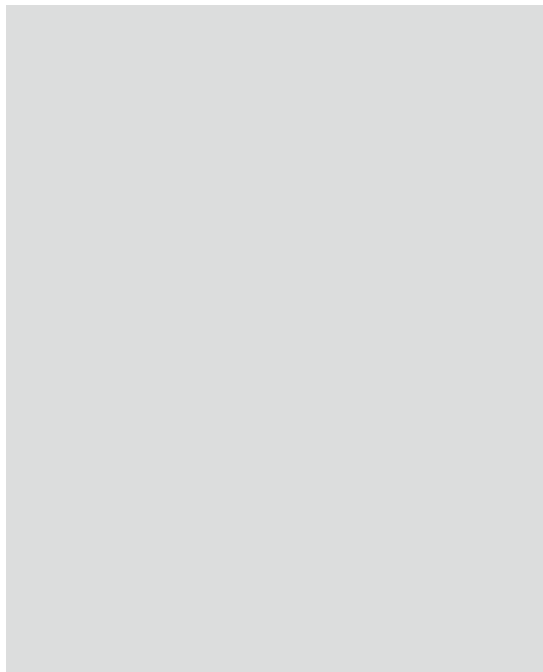
挿図61 同右 蓋裏の雀の顔の拡大



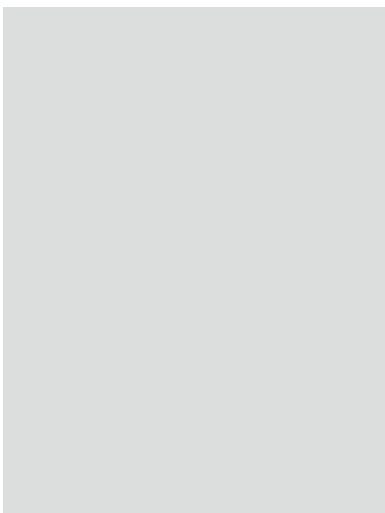
挿図60 同右 蓋表の雄鳥の顔の拡大



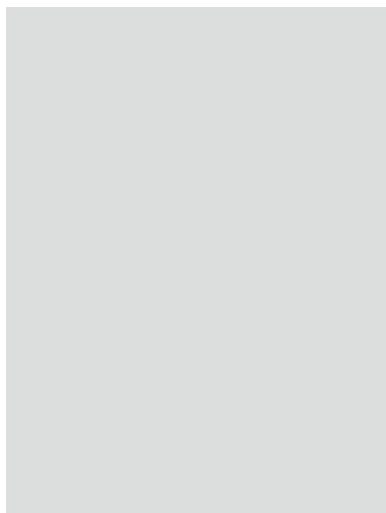
挿図59 TH414 (図12-44) 蓋表の鶏の家族



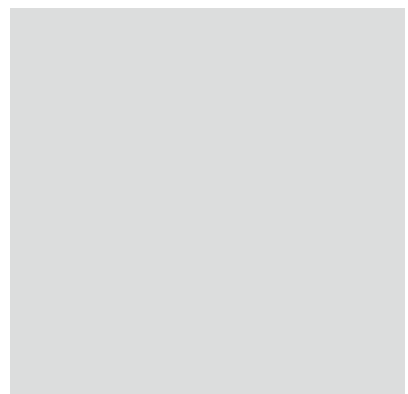
挿図62 TH418 (図12-45) 蓋表の竹に鶏の図



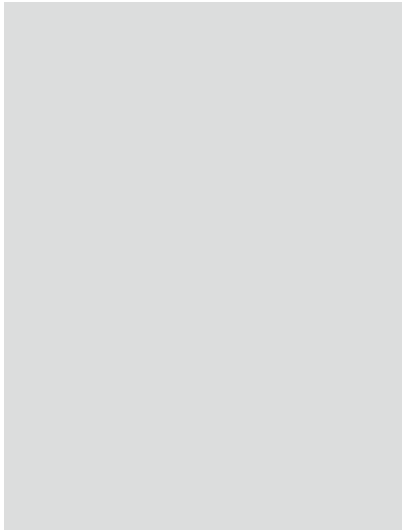
挿図65 同右 蓋表の雄鳥の拡大



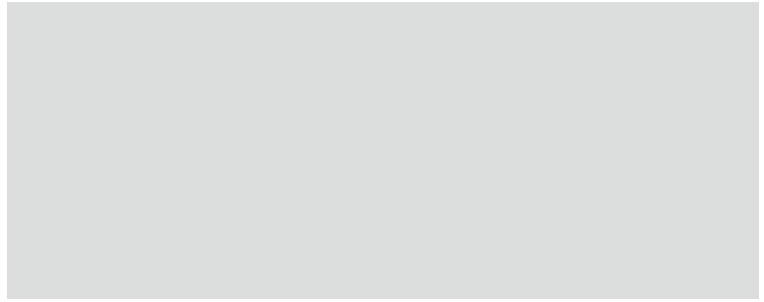
挿図64 同右 蓋表の雌鳥の拡大



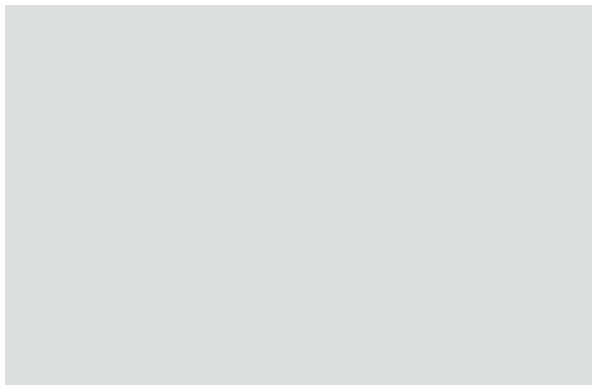
挿図63 同上 蓋表の雛の顔の拡大



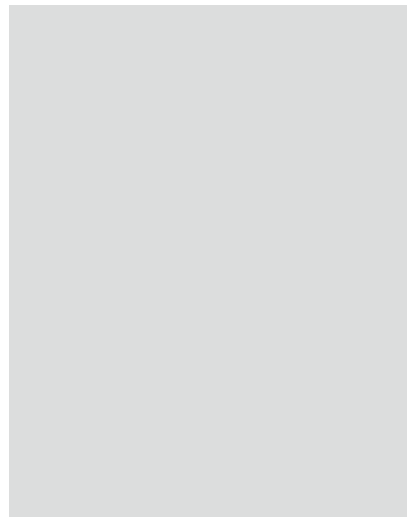
挿図67 同右 文様を描いたのちに面取部の金地を描割する



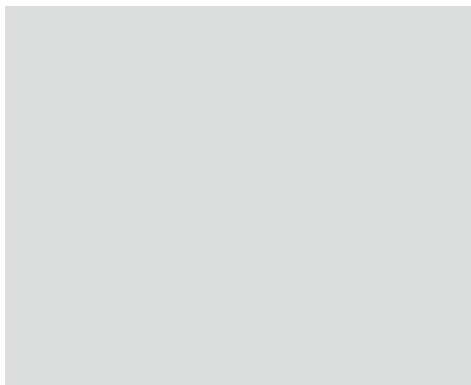
挿図66 TH401 (図12-46) 側面の梅と小松の図



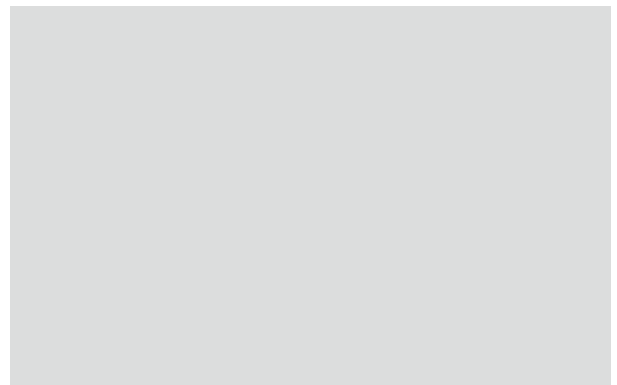
挿図69 同右 側面の萩の拡大



挿図68 TH400 (図12-47) 蓋表の水辺の萩



挿図71 同右 研出蒔絵の鯉の拡大



挿図70 TH355 (図12-48) 料紙箱蓋裏の研出蒔絵による鯉